

論 説

マキアヴェッリ諸作品の連関（3・完）
——リーダー像を中心に——

笹 倉 秀 夫

はじめに

第1章 『カストルッチョ＝カストラカーニ』——軍事リーダーの具体像

第2章 『戦争の技術』——リーダーはどう戦うか

第3章 『君主論』——君主のモデルは誰だったか (以上93巻1号)

第4章 『ディスコルシ』——前章までに扱わなかった重要論点を軸に

第5章 西洋古代・中世の戦術論——マキアヴェッリ思想の土壌・先駆者

1 クセノポン

2 フロンティヌス

(以上93巻2号)

3 ウェグティウス

(1) 情報収集・分析

(2) 紀律・訓練

(3) 策略

(4) 一般命題

4 中世の戦術論——古代の影響

(1) オノレ＝ボネ——正戦論と「マキアヴェッリ」の萌芽と

(2) クリスティーヌ＝ド＝ピザン

——マキアヴェッリに100年先行した女性

(2-1) 『政治学』

(2-2) 『戦術論』

全体の結び

(以上本号)

3 ウェゲティウス

ウェゲティウスは、4世紀のローマの軍学者である。フロンティヌスとは異なり実戦の経験はなかった、とされている。かれが書いた『軍事学』(*Epitoma rei militaris*)は、それまでの多くの戦術論の書物から——書かれた時代のちがいを顧慮せずに——選び集めた重要命題をダイジェスト版風にまとめ上げたものである。このためこの本は、便利な実戦向けの手引き書となり、中世においても、キケロら著名文人の本に匹敵する冊数——すなわち原典写本が200冊、諸言語への翻訳写本が100冊——がつくられている。実戦を担う貴族・騎士たちが、この本から学んでいたのだ。この書は、クラウゼヴィッツの『戦争論』(1832-34年)が出て近代戦マニュアルとなるまで、西洋版の『孫子』として読まれたのである(後述のようにこの書は、簡潔なかたちでまとめられているその諸命題・格言の点でも、形式面および内容上『孫子』に似る)。

ウェゲティウスが何よりも重視するのは、組織力、すなわち武器の習熟、野営中の規律遵守、軍事訓練等による集団力の強化である。体が小さく体力が劣り、知の水準もギリシャやオリエントの人間に比して低く、その初期においては、兵士の数も少なく、財力も乏しかった古代ローマ人がやがて世界を征服していったのは、徴兵に当たって慎重に人選し、規律を徹底させ、軍事訓練に励み、情報を丹念に収集し、臆病を厳しく罰することによってよく組織された、すぐれた軍隊をつくったからだ、とかれは言う。

軍隊は、小人数であっても、戦争の技術をマスターした指揮官が、訓練によって質を高めた兵士を動かす状態に達しておれば、大軍にも勝てる(1-1)。たとえばスパルタのクサンティッポスは、カルタゴに軍師として招かれ、それまで連戦連敗であったカルタゴ軍の改革を進め、その結果、アンティリウス=レグルスのローマ軍をも破った。これは、スパルタで発達していた規律化をカルタゴでも徹底的に推し進め、また高水準の戦

術論を活用したからである (第3巻序文)。軍事においても、主観的な勇氣より、組織性や学問の知が肝腎なのである。

ウエゲティウスは、この前提下に諸事項をいわば事務的に淡々と論じていく：徴兵検査時にはどのような体格・年齢・能力の者をどの階層から集めるべきか、訓練の徹底 (走ること・跳ぶこと・水泳・刀や槍、弓、投石器の使い方、荷物運び、隊列内での動き方などについて)、軍団の適正サイズと編成の仕方、指導部が心得ておくべき諸義務、歩兵と騎馬隊の編成法、戦場での軍の動かし方、野営地の選定・配置・防備の方法、健康・保健衛生 (夏の行軍は暑さを避け朝早く始める、冬の夜は行動を避ける、飲み水に注意する、傷病者の手当、夏は同じ場所に長く留まらない等々)、行軍の仕方 (隊列、敵国内での注意点、川の渡り方など)、合図や信号の整備、攻城兵器等の使い方、輜重のあり方 (食糧とまぐさ、燃料、水、酢、塩、ワイン、武器・工事材料等の準備)、戦術、都市の攻撃・防御の仕方、反乱者の処理方法、海軍についてなどである。

クセノポン・フロンティヌスとウエゲティウスとの大きなちがいは、指揮官の高い徳性を重視する論調がウエゲティウスでは相対的に少ないことである。古来、指揮官が人間味、克己、勇氣、知恵等を模範的に示すことが、軍隊を団結させ兵士のやる気を起こすのには欠かせないとされてきた (この点では戦術論は、君主鑑の戦場版であった)。しかしウエゲティウスは、そういうエートス論ではなく、紀律と訓練、組織の整備を通じて、兵士に勇氣を付け・軍の戦闘能力を強化し・情報処理を向上させる道をとる。これは、次の理由による：すなわち、今やローマは変質してしまっており、かつての素質のある自立的市民を指揮官・兵士として集めうる状況にはない；それゆえ今日では、凡庸な人間たちを主対象にしつつ、かれらが指揮官・兵士として十分戦えるように変えていくしかない (前提になっているのは、戦時にだけ集まる市民軍ではなく、常備軍である)；指揮官には高度の戦術上の技術や思考はなお求められるものの、ヨリ大切なのは、個人の力量の次元を超えた、組織性・制度・装備・軍事技術である、⁽¹³⁾と。以下で

は、本稿との関係で、興味深い点を挙げておく。

(1) 情報収集・分析

指揮官は、自軍と敵、戦場の状態を正確に把握し、その認識を踏まえた効果的な戦術を柔軟な精神で考えることが肝腎である。敵をよく知るためには、情報収集のためにスパイを各地に派遣したり、内通者や捕虜を利用したりする。調べるのは、敵の騎馬隊の装備や食糧の状態、その土地の形状、敵が短期決戦を望んでいるか否か、敵の指導部は、性急か慎重か、勇敢か臆病か、訓練されているか、戦術論の知識があるか経験だけに頼っているか等々である。その上で、それらの情報を踏まえた、参謀たちとのフランクな討議が欠かせない。指揮官個人の知や勘より組織知が重要なのだ。

「重要なのは、指揮官が、戦争についてよく知っており、敵軍と自軍の状態をわきまえている人物を全軍から集め、きわめて有害である追従を取り除いた雰囲気の中で、敵軍と自軍でどちらが数が多いか、武器と防具はどちらが完備しているか、どちらがよく訓練されていて勇敢かを頻繁に議論することである。」(3-9)

「用心深い賢明な指揮官は、参謀たちを集めて自軍と敵との実力を比較するだろう。それはまさに、裁判官が民事裁判で両当事者の間で審判するのと同じである。もし指揮官が、いろんな点で自軍が敵よりもすぐれていると判断したら、けっして決戦に賭けることを躊躇してはならない。しかし、もしかれが、自軍が敵軍よりも劣っていると判断したら、正面戦を回避しなければならない。なぜなら、奇襲・伏兵・謀略が、巧みな指揮官によって首尾よく行使されるばあいには、数と力とにおいて自軍に優越している敵に対して、しばしば勝利を得させるものだからである。」(3-9)

(13) この思考は、東洋では明朝の軍学、それを継受した荻生徂徠の『けんろく鈴録』・『鈴録外書』の思考に近似している。拙著『思想への根源的視座』(北大路書房、2017年) 273-274頁。

戦場においても、観察によって敵の特徴を詳らかに把握する。「敵が攻撃を仕掛けてくるのが主として夜なのか、夜明けなのか、食事どきなのか、休息時なのかをよく把握しておく必要がある。敵の習性を知り、かれらの常套手段に対して防備を固めることが大切である」（3-6）。

戦場については、次のようにある。「軍の配置に際しては三つのものを念頭に置いておかなければならない。太陽、土埃、および風である。[…]先見の明のある指揮官は、先のことに備えるべきである。かれはその日の経過につれて生じる、太陽の位置の変化や、一定の時刻に起こり戦闘に妨げとなる風などによって妨害されぬよう配慮しておかねばならない」（3-14）。布陣に際しては、高所を占めるのが有利である。自軍の騎馬隊に自信があれば、それを活用するために樹木や池沼のない平坦地を戦場を選ぶ。敵の騎馬隊が優秀であるときは、騎馬隊に不向きな、起伏が激しい土地を選ぶ。（3-10）

海戦では、陸側に位置する方が有利である。当時の海戦では船を相手の船に体当たりさせて沈める仕方が多かった。その際、沖側から陸地側の船に向かって突進するのでは、座礁を警戒しなければならず、自由を奪われる。（4-46）

以上、『孫子』地形篇における「知彼知己、勝乃不殆、知天知地、勝乃不窮」（敵と自軍、そして戦場についてよく観察せよ）と同じである。

行軍中は、戦闘中よりも危険が大きい。行軍中は見えない敵から攻撃される可能性があるし、戦闘装備を欠いているので攻撃に対して弱いからだ。したがって、行軍する場合は、周到な準備が肝腎である。まず、関係地域のくわしい地図を確保する。それには、重要地点間の距離、道の状態、近道や脇道、山岳や川が正確に描かれていなければならない。加えて指揮官は、事情に明るい者や地元民から個別に聞き取りをし、それらの情報を自分で総合しなければならない。客観的で正確な判断は、そこで初めて可能となる。行軍中は慎重に、道案内や斥候を使わなければならない。

敵も味方もが状況に応じて変わるものであることを踏まえるのも、重要

である。ウェゲティウスは言う、戦闘に未熟な多くの人は、敵を狭い場所に追い込んだり・多くの兵によって完全に包囲したりして逃げ場を断れば完璧な勝利に至りうると考える。しかし逃げ場を失うと、敵は自暴自棄になって凶暴・大胆となり、死の恐怖に直面して「武器で血路を切り開こう」とする。人は、死が避けられないと知るや、ともに雄々しく死のうと腹を固めるので、危険な存在になる。それ故、「敗走する敵には、道を開けてやれ」というスキピオのことばは、正鵠を射たものである。(3-21) 敵に対して逃げ道を与えてやると、敵はそこから逃げようとして背中を見せ、必死の覚悟をなくしてしまう。このような敵を背後から襲えば、殲滅は容易である。

逆に、戦闘で自軍が敗れたときにも、この必死の心理を利用することによって敵を崩すことができる。ウェゲティウスは『アエネアス』から、「敗れた軍の安心へのただ一つの道は、安心を求めないことにある」(3-21) との名言を引用している。自軍が敗れて退却している際、「無思慮に戦列を乱して追撃してくる敵を、再結集して反撃して打ち負かすことがしばしばある。勝利のあとの喜びで有頂天になっているときに恐怖に襲われるほど、危険なことはない」(3-25) というのも、人間心理の巧みな利用である。この点は、後述する。

(2) 紀律・訓練

ウェゲティウスは、紀律・訓練をとくに重視する。平和な時代が続くと、人びとは私的な生活・非軍人的な職業に慣れ親しむようになり、その軍隊は軍事訓練をなおざりにしてしまう。古代ローマでも、既に第1次ポエニ戦争後の平和時にそれが起こった。最強の軍隊によって領土を拡大してきたローマ軍も、平和が続いたことによる弛緩のため、第2次ポエニ戦争では地元イタリアの地で戦いながら、ハンニバルに太刀打ちできなかった。したがって今のような平和時においても、すぐれた素質の兵士を集めること、かれらを不断に訓練し続けることを怠ってはならない。徴兵制に

よって集めた市民兵は、外国の傭兵より安くつくし、常時訓練が可能な点でも、はるかに良い (1-28)。

紀律と訓練で、弱い軍隊も強くなる。スキピオは、他の指揮官の下で敗北を繰り返した軍隊を率いてスペインに渡ったが、その地で紀律を確立し、またこの軍隊を野営地の壕を掘る作業で鍛えるなどして訓練を進めた。かれは、そうしたかたちで変貌を遂げた軍隊を率いてアフリカに上陸し、ヌマンティアを占領し、その住民たちを殲滅した。(3-10)

弱い兵に自信を付けるには、次の方法がある。「新兵や永らく兵役を外れていた兵士を率いる指揮官は、渡河の地点や、峠や、木が茂った隘路や、沼沢地や、その他の難所に、敵に見破られることなく待ち伏せを置け。よく準備して、敵が無防備状態にあるときに、食事中に、睡眠中に、あるいは大小の休憩中に、かれらがくつろいでいるときに、武装していないときに、裸足の時に、馬に鞍をつけていないときに、その敵を襲撃」せよ。これらの手段で敵を倒したら、新兵等は自信をもつようになるだろう、と (3-10)。

(3) 策略

ウェゲティウスも、策略を重視する。ここにも思考の柔軟性、合理性、強い意志力が働いている。

かれは、原則を次のように出している。「良い将帥は、危険が敵と味方とで同等程度であるときは、戦闘を開始しない。その代わりに、見えない場所から、できるだけ自軍の犠牲を少なくする方法で敵を殺害するし、殺害できなくても、恐怖を与える。」(3-9) とはいえ、フロンティヌスにあった、嘘や毒を利用する戦法は、見当たらない。

(a) 奇襲作戦 奇襲は、大きな効果を得られる。「敵より数が少なく実力が劣る軍が、良い将帥に率いられて襲撃を加えたり待ち伏せしたりして、勝利を取り戻すことがある」(3-9) 効果的なのは、敵が「行軍で疲れきっているとき、渡河で分断されているとき、沼地に入ってしまった

とき、山越えで難儀しているとき、野原で分散し警戒していないとき、野営地で眠っているとき」などである。これらでは敵は臨戦態勢に入っておらず、構える前に殺されうるからである (3-19)。

籠城している敵に奇襲をかけるには、敵軍の習慣を観察によって知悉しておくことが大切である。敵がいつ作業をやめて気を抜くかを知る必要がある。敵が気を抜くのは、両軍の兵士が休憩したり肉体的要求を満たすため分散したりしたときである。それは、時には日中に、時には夕方に、しばしば夜中に、また食事時に起きる。こういうチャンスには、まず退却を装い、敵がすっかり油断したときに、突如攻城具や梯子で侵入を試みる。(4-26・27)

海上での奇襲は、陸上でと同様、相手をよりたやすく打倒できるよう、警戒していない船団を襲ったり、島に挟まれた適当な狭い水道で待ち伏せしたりすることだ。攻撃の絶好のチャンスの時には、運命が与えてくれたこの贈り物をしっかり受け止める。そのチャンスとは、敵の船員が長時間櫓を漕いで疲れているとき、向かい風に妨げられているとき、潮の流れが船嘴せんし(rostrum) に抵抗しているとき、敵が警戒することなく眠っているとき、停泊地に出口が一つしかないときなどに生じる。(4-45)

(b) 退却している敵の倒し方 敵が退却しているのを撃つには、騎兵の小隊に敵を追わせる一方、本隊を別のルートで、敵の側面を撃てるように差し向ける。騎兵小隊は、敵に追いつき、背後から軽く攻撃をかけ、ある程度戦って退く。すると敵は、これで追跡や待ち伏せは終わったと考え、気を抜いて不注意になる。そのとき、別ルートで到達した本隊が敵を奇襲し、殲滅する。あるいは、間道を使って軽装兵を先まわりさせ、待ち伏せさせておく。敵がその前を通過するとき攻撃するのだ。その間に後から追う部隊も攻撃をかけ、挟み撃ちにする。(3-22)

(c) 敵の内部攪乱 「敵の内部に争いの種をまくのが上手なもの、熟練した指揮官の証である。どんなに小さい国でも、たとえ敵に敗れようと、内乱が生じて自滅しない限りは、壊滅するものではないからである。」

(3-10)

(d) 自軍が退却する場合の戦い方 先にも見たが、戦闘で敗れたときも、まだ勝つ可能性が残っている。「敗れた軍隊がその力を取り戻して〈隊列を乱しつつでたために追跡してくる敵〉を殲滅することができる。勝利を祝っている側は、攻撃されて、過信から突如恐慌へと転落するときほど危険に迫られることはない。」「勝利した敵を、伏兵で攻撃する戦術が追求されなければならない。これが効果をあげれば、士気も取り戻せる。その機会は、必ずある。人の心は、成功の後には、それだけ尊大で不注意になるからである。初戦で敗れたからもう終わりだ、とってはならない。戦争で勝った者の多くは、初戦でも勝っていたわけではないことを考えよう。」(3-25) 逃げる時には、適当な谷や木が茂った山に伏兵を置き、敵がその伏兵に引っかかったら、本隊も戻ってきて、合同で攻撃する。追跡してくる敵が眠ったときには、後戻りしてそれを撃つ。敵を追跡しているときは、前の敵を後ろから奇襲する。また、自分たちを追跡している敵の前半部が河を渡ったが、後半部がまだ渡りきっていないときに、その前半部を攻撃する。自分たちが追っている敵の後半部がまだ渡りきる前に、それに追いついて撃つ。(3-22) 東洋の「半渡を撃つ」である。

(4) 一般命題

第3巻末尾の一連の一般命題(別人の筆によるともされている)は、基本的な心構えや考え方、ものの見方をそれぞれが端的に語っているため、中世においてとりわけ重宝がられた。これらの一般命題は、簡明さの点でも意味深長さの点でも、『孫子』を彷彿させる。マキアヴェッリの『戦争の技術』もこれを数多く——無断引用のかたちで——利用しているのであり、一般命題の影響の大きさが推測できる。それらの一部を掲載しておく。

(a) 客観性重視

・「戦争の性質は、次のようなものである。自軍に有利となるものは敵軍に

不利となり、敵軍に役立つものは常に自軍の妨げとなる。」

- ・「自軍と敵軍について正確に評価できる指揮官は、敗れない。」
- ・「騎兵に自信のある指揮官は、それに適した地形を選び騎兵を主力に使うべきである。歩兵に自信のある指揮官は、歩兵戦向きの地を求め、歩兵を主力に使うべきである。」
- ・「兵士の数が多いことよりも、兵士の士気が高い方が優る。兵士の士気が高いよりも、地の利がある方が優る。」

(b) 合理的態度

- ・「穀物その他の必需物資を欠いた軍隊は、攻撃に出ることなく消えていく。」
- ・「敗走する敵を隊を乱して無思慮に深追いすることは、勝利を敵に譲り渡すようなものである。」
- ・「[戦闘正面幅を広げようと] 部隊を横に長く展開させるよりも、方陣部隊の後に予備部隊を配置して戦うのが良い。」

(c) 紀律の重視

- ・「部隊は、辺境の駐屯地での宿営任務に慣れれば慣れるほど、注意深く紀律化されればされるほど、戦場で危険にさらされることが少なくなる。」
- ・「敵に向かう前に、兵士は十分に試されていなければならない。」
- ・「生まれつき勇敢な者は、少ない。人は、訓練と紀律によって勇敢になる。」
- ・「軍隊は、勤労と鍛錬によって強くなり、怠惰によって弱くなる。」
- ・「兵士は、兵舎においては懲罰とその威嚇とによって秩序を保つ。しかし戦場では希望と報償とによってやる気を起こす。」
- ・「軍が勝利を確信していない限り、戦ってはならない。」

(d) 機敏さ・変幻自在

- ・「敵が計画を知ったと分かたら、作戦を直ちに変更せよ。」
- ・「なすべきことについては多くの人の意見を聞き、しかし実際の作戦は、もっとも信頼できる少数者とだけで、できれば自分だけで立てよ。」

- ・「事前に敵に察知されていない作戦が、最上である。戦闘においては、チャンスを生かすことが武力に訴えるよりも重要である。」
- ・「敵のスパイが野営キャンプに入り込んでいるときには、日中、全兵士にテントに戻るよう命じよ。そうすれば敵のスパイは、すぐ見つけれられる。」

(e) 策略重視

- ・「突如の行動は敵を驚かせるが、敵が馴れっこになった行動には効果がない。」
- ・「敵の糧食を断ったり、敵を急襲したり怯え上からせたりすることによって勝つ方が、戦闘で勝つよりもすぐれている。戦闘においては、武力よりも運命によるところが大きいからである。」
- ・「武器によるよりも飢餓によって敵を追い詰めるのが、すぐれた戦術である。」
- ・「敵の兵士を墮落させ、降伏を切望するよう促すことは、とりわけ効果がある。なぜなら敵は、殺害よりも脱走でヨリ打撃を受けるからである。」

以上に見たように、ウェゲティウスは誠に「西洋の孫子」に当たる。伝承によれば、ナポレオンはフランス語に訳された『孫子』に魅せられ、それを片時も手放さなかった；また、第一次世界大戦に敗れ革命のためオランダに亡命したドイツ帝国のヴィルヘルム 2 世は、『孫子』をそこで初めて手にして「開戦前にこれを読んでいたら」と嘆いた。これらエピソードの真相はともかく、西洋でも戦術論は古代から高度に発達していたのだし、『孫子』に引けをとらない高水準のウェゲティウス本をナポレオンは読んでいたのだから、ナポレオンやヴィルヘルム 2 世らをここまで『孫子』に感激した人物にする必要は、実際にはなかった。

以上で見た 3 人のうち、クセノポンとフロンティヌスが書いていることは、指揮官が戦争の場においてどういうことに心がけるべきかを中心にしており、ウェゲティウスが書いていることは、軍隊をどう組織化するか・

どう合理的に動かすかを中心としている。これらはいま一つ、マキアヴェッリの『戦争の技術』や『ディスコルシ』をはじめとする作品を、内容的に規定している。このことは、議論の柱である、指揮官のリアルな認識・賢明さ、紀律・訓練、策略の重視、そして（ウエグティウスには欠けている）道徳・正義の尊重論が、古典とマキアヴェッリとで重なっている点でも、それらに関して議論のために挙げている諸事例と、それを通じたメッセージの内容が古典とマキアヴェッリとで重なっている点でも、言えることである。

マキアヴェッリの思考が古代ギリシャ・ローマ的だということは、第一に、これら古代的戦術論をかれが継承している事実から確認できるのであり、第二に、その伝統的戦術論を君主が重視すべきとの立場が古代におけると同様『君主論』でも基軸としてあり（『君主論』の君主は戦争の指揮官でもある）、それゆえ『君主論』という政治の書が戦術論と深く関わっているという事実から、確認できるのでもある。

4 中世の戦術論——古代の影響

議論の背景となる〈中世における戦争〉の実態をまず、考察しておこう。〈中世における戦争〉には、これまで二つのイメージが積みまってきた。すなわち、(1) 中世では古代の科学的で合理的な戦術論・軍編成は失われており、戦闘は行き当たりばったりの非組織戦だった、また騎士たちは重すぎる甲冑を付け非機動的に戦ったというイメージであり、(2) 中世は騎士道の時代だったから戦いは、基本的には騎士同士の、様式をまもった一騎打ち中心だったというイメージである。デルブリュックやオーマンらの永らく支配的であった説が、⁽¹⁴⁾ そうであった。⁽¹⁵⁾ ⁽¹⁶⁾ だが、これらのイメ

(14) Hans Delbrück, *Geschichte der Kriegskunst im Rahmen der politischen Geschichte*, Bd. 3: Das Mittelalter, 1907.

(15) Charles Oman, *The Art of War in the Middle Ages*, 1924.

(16) この点は、David Whetham, *Just Wars and Moral Victories*, 2009. に詳しい。

ージは、以下のような事情が明らかになっていくなかで支持されなくなっている：

(1) の、中世は科学的・組織的な軍事と無縁だったという見方をめぐって 実際には中世においても戦闘は、合理的な部隊編成・訓練、緻密な準備・作戦・戦術にもとづいておこなわれていた。たとえば、

(a) 百年戦争の初期、1346年のクレシーの戦い (Bataille de Crécy) では、エドワード黒太子率いる1.2万のイギリス軍が4万のフランス軍に勝利したが、その勝因は、次の点にあったとされている。第一に、イギリス軍の武器の長弓が高性能であったうえに長弓部隊は日頃から訓練されていた。長弓の射程距離 (200メートル) はクロスボウのそれ (100メートル) を遙かに超えていた。長弓が1分間に6、7発撃てるのにクロスボウは2、3発程度しか撃てなかった。イギリス軍は、このため緒戦の射撃戦を制しえた。第二に、イギリス軍は丘の上方に布陣しそこで下方のフランス軍を迎え撃った。第三に、イギリス軍はフランスの重騎兵に対し防御のために壕を掘り、先の尖った杭を前面に張り巡らした。第四に、イギリス軍の矢はフランスの重騎兵の馬を効果的に倒した。フランスの重騎兵たちは、馬を射られて倒れ後続部隊の突撃を妨げた。

(b) のちにシャルル5世の軍の総司令官に着任する、傭兵隊長のベルトラン＝デュ＝ゲ克蘭 (Bertrand du Guesclin, 1320-80) は、ゲリラ戦、夜襲、策略による戦争でエドワード黒太子率いるイギリス軍をフランスのほとんどから追い出すことに成功した。

(c) 1415年のアジャンクールの戦い (Bataille d'Azincourt) では、ヘンリー5世率いる7千のイギリス軍は疲労困憊しておりながら、待ち構えていた2万のフランス軍に勝ったのであるが、その勝因は、次の点にあったとされている。第一に、森に挟まれた狭い地形を利用して、フランス重騎兵がフランキング (側面へ回り込んでの攻撃) ができないようにしたこと、第二に、フランス軍が湿地にはまるよう巧みに布陣したうえ、正面攻撃を防御の杭によって制しつつ長弓で攻撃したこと、第三に、フランス重騎兵

はこのため敗走し、後から突撃して来たフランス軍と衝突し混乱に陥ったこと、に。

(d) 一連のイングランド・スコットランド戦争でも、戦術の巧みさが効果を発揮している：①1297年のスターリング＝ブリッジ (Stirling Bridge) の戦いでは、ウィリアム＝モーリス率いるスコットランド軍は、狭い橋で敵のイングランド軍を分断する「半渡を撃つ」作戦で勝利した。②1298年のフォルカーク (Falkirk) の戦いでは、エドワード 1 世のイングランド軍が、ウェールズ戦争から学んで採用した長弓部隊によって、槍兵のスコットランド軍に雪辱を果たした。③1314年のバノックバーン (Bannockburn) の戦いでは、第一日目こそ、両軍が見守る中でスコットランド王ロベルト (Robert the Bruce) と (エドワード 2 世率いる) イングランドの騎士との中世的決闘がおこなわれたが (ロベルトが勝った)、二日目にはスコットランド軍は、強行軍で到着し疲労しきっているイングランド軍を早朝に攻撃し、半渡を撃つ作戦で壊滅させた。

(e) アルビジオア十字軍においても、1243-44年のモンセギュール攻撃に投石機 (Trebuchet) が使用され、また山岳兵が活用された。投石機以外の中世の攻城兵器も、中世の軍事技術が高度であったことを意味している。

確かに中世においては、迷信・妖術や非科学的なカトリック的世界観が支配していた (とくに1300年以降の後期中世)。中世の絵画や彫刻、小説は古代に比して稚拙であり、日常生活の技術や労働技術の水準も低かった。しかし、12・13世紀には水車や風車の活用、建設技術、精錬装置などの高度化が確認でき、農業革命や (とくにシトー派に担われた) 産業革命が指摘されている。⁽¹⁷⁾ 戦争においてもこの動きに対応したものとして、上記のような戦術・攻城兵器の発達を確認できるのである。これらの動向は、イスラム世界等からの技術・学問の導入の他に、古代ローマの科学的・合理的で組織化重視の戦術論や軍事工学がかなり継承されていた事実と、無縁では

(17) J. ギャンベル『中世の産業革命』(坂本賢三訳、岩波書店、1978年)。

なかろう。ウェゲティウスやフロンティヌスの写本・翻訳書がキケロの書物に匹敵するほどに広く流布していたという前述の事実も、この現象の一部である。

(2) の、騎士道が規定力をもっていたという見方は、中世の戦争の記録に照らして否定される。確かに平時には、騎士道はある程度まもられていた。文芸・宮廷作法の面で、その影響はことに顕著である。しかしいつの時代でも、戦争においては自軍の敗北や大損害は、是が非にも避けるべきものだ。そしてこのためには、リアルな認識や、効果的戦術・反道徳的な行為も辞さない目的合理的な戦い方の工夫が欠かせない。しかも敵への憎悪、集団心理、人間の暴力性は、いつの時代でも反道徳を増幅させる。

騎士道とは無縁の残虐行為は、同じキリスト教徒同士の間でも確認できる。後述するクリスティーヌ＝ド＝ピザンは、1400年頃のフランス国内で戦争する騎士たちが略奪・暴行を働いていることを、「人民の防衛をしているつもりの方が、略奪したり、強奪したり、さらには人びとを半殺しするほどに残虐に扱ったり、住居に放火したりするときに、敵が自分たちにそういうことをしたら許さないとするのは、法の大きな誤解・曲解である」と告発している (fn. 1, *Livre du corps de policié*, 1407, p. 17)。クリスティーヌはまた、次のようにも言う：「今日の人は、ある国、城塞、町等を征服したとき、町に入って飢えた犬のように振る舞う。かれらはキリスト教徒を、躊躇することなく殺戮する。女性を辱め、すべてを破壊する。かれらと同じ存在である者に対し、自然と神との法に反してこういう残虐をおこなうとき、それをかれらはどういう心でやっているのだろうか」(p. 29)、と。捕虜に対する残虐さについても、クリスティーヌの批判は厳しい：「現代では貪欲のため、支払えないほど高額の身代金を捕虜側に要求する冷酷で非人間的な者がある。捕虜に加えられている拷問を見たり聞いたりするのは、おぞましいことだ。それは、イスラム教徒さえやらないほどの残酷で非人間的なものだ。」(p. 29)、と。これらが、騎士道文化がなお生きている、彼女の時代の、戦闘者の実態であった。

実際、たとえば、①上記1346年のクレシーの戦い後、エドワード黒太子はカレー（Calais）で非戦闘員市民を殺戮し略奪を許した。②1370年、リモージュ（Limoges）の包囲戦においてエドワード黒太子は、フランス軍へ協力したことの報復として女子供を含む住民3000人を虐殺した、③上記1415年のアジャンクールの戦いの直後、ヘンリー5世は捕虜たち（貴族中心）を拘束・抑留しきれないとして、建物内に閉じ込めて放火して虐殺した。戦闘行為はこのように、いつの時代でもインモラルを内包している。

12・13世紀、中世盛期の騎士道文化花盛りの時代においてさえ、しかもキリスト教騎士の理想に燃えて聖地に向かった十字軍の騎士たちさえ、実際には騎士的ではなかった。このことは、アラブ人たちが目撃していた。たとえばアミン＝アルーフの『アラブが見た十字軍』⁽¹⁸⁾には、十字軍中の、フランク王アモリーの軍について次のように記録している：1168年10月にこの軍がエジプトを攻撃したとき、かれら「西洋人はビルバイスの町を奪い、住民を男も女子どもも、ムスリムと同じくコプト派のキリスト教徒も虐殺したのだ」と（296頁）。

また次のようにもある：十字軍の騎士たちは1204年4月には、コンスタンティノーブルの略奪をおこなったのだが、その際には近郊のルームの町で次のような振る舞い方をした。「ルームのすべてが殺されるか、身ぐるみはがれた（とモースルの歴史家は伝える）。[ルームの町の]何十人かの名士たちはフランクに追われ、ソフィアと呼ばれる大聖堂に避難しようとした。そこで一群の司祭や修道僧が外へ出て、十字架と福音書をかかげ、寄せ手に命乞いをしたが、フランクはその懇願に耳を貸さない。彼らは全員を殺し、聖堂を荒らした。遠征軍についてきた一人の娼婦についての話もある。彼女は総主教の座にすわって、みだらな歌を歌い出したという。一方、酔っぱらった兵士たちは、近くの僧院でギリシア人の修道女を犯すの

(18) アミン＝アルーフ『アラブが見た十字軍』（牟田口義郎・新川雅子訳、筑摩書房、2001年）。

だった。」（同書384頁）聖戦である十字軍戦争では、キリスト教徒でない者、イスラムに対しては騎士道や正義に従う必要がないとの意識があったかもしれない。しかし上の事例の多くでは、残虐性の犠牲者は、キリスト教徒たちであった。

アルビジョア十字軍に関しても、騎士たちは、1209年のベジエ（Béziers）の町で7000人の住民（ほとんどがカトリック教徒であった）を虐殺した。これも、同じキリスト教徒に対する、地元での残虐性である。

日本の中世でも変わりはない。策略やルール違反、暴力が活用されていた。佐伯真一や菅野覚明は、中世におけるこの面、中世の「もののふの道」、「武者の習い」の下での戦闘では実際には卑怯な策略が駆使され、残酷さが目立ったとする。⁽¹⁹⁾ 実際、平家物語に記されている源義経の戦術では、一ノ谷や屋島における奇襲や、壇ノ浦での潮の流れを利用した海上戦が見られたし、また同じ壇ノ浦海戦で義経は、平家側の舟の水夫たち——かれら非戦闘員の殺傷は禁じられてきた——を狙い撃ちしたり、女性や非戦闘員も殺した事実が確認できる。

戦争というものは、古今東西を問わず、そういうものなのだろう。人は、騎士道・武士道の道徳や名誉意識に規制され、礼儀作法、絢爛たる衣装・装備でまわられてはいても、いざ戦闘に入って敵と対峙し、鉄の輝きを見、血を浴びれば、上記のごとき振る舞いに走ってしまうものなのだ。

次に扱うボネとクリスティーヌとは、中世後期に戦争のこの現実を直視しつつ、ウエグティウスやフロンティヌスら古代の戦術論を踏まえて戦争・政治を考えた。本稿ではとりわけクリスティーヌを重視する。彼女は、マキアヴェッリに先立つ100年前に、宮廷に属す一女性でありながら、かなりの程度マキアヴェッリの先駆となる書物を書いたのであった。否、女性であったからこそ——当時の男性知識人が宗教者に典型的なように神学ないし神学的哲学から自由でなかったのに対し——フリーの知識人とし

(19) 佐伯真一『戦場の精神史』（NHK ブックス、2004年）。菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社現代新書、2004年）。

て、古代のメッセージをかなりストレートに受け止め自由に思考できた、と言える。この点で彼女は、カトリック神学から自由に思考できる機が熟していたルネサンス期において、しかも失脚してフリーとなったマキアヴェッリと、相似た状況下にあったのである。

マキアヴェッリがクリスティーヌの本を読んだ形跡はない。それなのに両者の思考が似ていると言えるのは、なぜか。それは上述のように、二人が共通して基盤とした古代の戦術論が二人に共通した軍事・政治の思考をもたらしたからである。マキアヴェッリの思考の源泉、古代戦術論がかれに与えた影響の大きさは、この事実からも傍証できるのだ。

(1) オノレ=ボネ——正戦論と「マキアヴェッリ」の萌芽と

ボネ (Honoré Bonet、別名：de Bouvet、1343年頃-1410年頃) は、ベネディクト派の僧侶で、戦争論である『戦闘の木』(*Arbre des Batailles*) を書いたとき (1382-87年頃) は、プロヴァンスの一修道院の院長だった。ボネはこの本を、フランス王、シャルル 6 世に献呈した。かれは、1386年から1399年にかけては、このシャルル 6 世に仕えている (後述のクリスティーヌも、シャルル 6 世の宮殿に出入りしていた)。

『戦闘の木』は、戦争においても国同士がまもるべき原則がある、換言すれば「ルール正義」の尊重が求められるとする、「戦争と平和の法」(国際法) の思想を先駆的に示した作品の一つである。ボネはこの本を、少年時代以来の、出会った騎士たちに関する記憶や、自分が同時代人として見た事件を踏まえ、かつ聖書・神学、ローマの古典の教えを基礎にしつつ書いている。それゆえこの本は、一方では、神学と騎士道とに結びつく中身を見せてはいる。しかしかれは、他方では、戦争において策略や暴力が活用される現実と向き合い、それらを正義原則と関わらせてどこまで手段として許容しうるかを検討する。この点では本書は、中世戦術論の位置・傾向、とくに軍事上のマキアヴェッリズムの成長過程を知るうえでも、すなわち後述するクリスティーヌからマキアヴェッリへの戦術論発達史の端緒

を知るうえで、興味深い。

上から窺えるように、『戦闘の木』の関心事は、〈戦争がどうかたちで始まって展開していくか〉といった現にある慣習や実例を記録することにはないし、〈戦術をどう使うか〉の手引を示すことにもない。関心事は、聖書や神学（とくにトマス＝アキナスのそれ）、さらには騎士の倫理規範を基盤にしつつ、〈戦争はどうかたちで戦われるべきか・戦争をめぐるにはどのような原則がまもられるべきか〉が、どう聖書等に示されており、どう社会で現に正しい慣習として働いているかを示すことにある。それゆえにボネは、現に生じた戦争上の行為を、自分の原則にもとづいて批判しもある。たとえば、かれの同時代では捕虜に対し不当に高い身代金が求められている。かれはこれを、聖書・神学の基準に照らして批判する。この点は、マキアヴェッリが古代人の振る舞い方を手本・基準にして、同時代の戦争や政治のあり方を批判するのと同じ形態・発想にある。

ボネは、戦争をすること自体は神の意に適うものだと考える。神は、秩序を乱す側を敗北させて罰す。すなわち戦争の目的は、正義の回復である、と。正戦論、すなわち教父のアウグスティヌスから始まり、グラティアヌス『教令集』、トマス・アキナスらを経て定着し、キリスト教徒をとらえ続けた議論の伝統に、ボネも棹さしているのだ（かれは、とくにアキナスの議論に定礎しているが、新方向も出している⁽²⁰⁾）。

しかしながら戦争においては、正しい者が敗北することもある。この場合についてはボネは、「それは、善人がその忍耐力を強めるよう、神が試練を与えておられることによる；それゆえ善人は、その敗北を身に引き受け、忍耐の徳を示さなければならない」と言う。ボネは、フランスのルイ9世（Louis IX, 1214-1270年。在位は、1226-1270年）の事例を引き合いに出している：ルイ9世は、第7回十字軍に参加して、裏切り者と邪悪な不信心者（イスラム軍）とに敗れ捕虜となった；これは、神慮によることであった；よく似たことが、旧約聖書の『士師記』に出てくるからである；す

(20) 柴田平三郎「トマス・アキナスの《正戦論》」（『獨協法学』85号、2011年）。

なわち『士師記』は、イスラエルの民が神に約束されたカナンの中に入った後、敵が次々と立ち向かって来、困難に陥らされた様を描いている；神は、ユダヤの民が戦争の仕方を忘れないため、またかれらの内に蔓延していた腐敗を除去するため、そうした試練を与えられたのだった、と。(第 4 卷 53 章)

『戦闘の木』はフランス語で書かれたので、外国でもよく読まれた。この本は、イタリアの法律家、レニャーノ (Johannes Regnano) の『戦争・復讐・決闘について』(*De Bello, de Represaliis, et de Duello*. 1360 年頃の本) にかなり依拠しているが、その事実は示しておらず、今日的に言えば無断引用・盗用を犯した作品である。だが盗用は、近代に入るまではよく見られた。既述のように、マキアヴェッリの『カストルツォ = カストラカーニ』(ディオゲネス = ラエルティウスの無断引用) や『戦争の技術』(ウエグティウスの無断引用) もまた、この盗用史上の一コマとしてある。

以下、戦闘に関しどう行為し・どういう行為を慎むのが正しいか (*ius in bellum*) に関し、重要箇所を中心に検討しよう。

(a) 『戦闘の木』第 3 卷 7 章は、戦闘中、死を避けるため逃げるのは許されるか、を問う。かれはこの問いをめぐって、まず、よくある肯定意見と否定意見とを示し、次にそれを総括した自分の見解を示す。中世に伝統的な、「sic et non」の作法による議論である。その議論において三段論法を駆使しているのも、中世哲学の作法を踏襲したものである。

まず、肯定意見は、〈苦痛や忌み嫌うべきものは避けるべきである。死は忌み嫌うべきものである。ゆえに、死は避けるべきであり、避けるため逃げることは善である〉というものである。

これに対する否定意見は、〈不名誉なことはすべきでなく、人は肉体の価値より名誉という永遠の価値を選ぶべきである。逃げるのは不名誉である。ゆえに、逃げるべきではない〉というものである。

これらに対しボネ自身の答えは、①キリスト教徒がサラセン、イスラム

教徒と戦っているようなときで、自分が逃げるのが味方が総崩れとなることにつながるような場合には、人は死を選ぶべきである；信仰のために死んでも天国へいけるのだから、その死は最高の善である；しかし、自分ががんばってみても所詮意味がないような状況下ならば、逃げてかまわない；他方、逃げて逃げきれない状況下であれば、人は雄々しく死ぬべきである；②キリスト教徒の主君同士が戦っているときは、自分の主君との契約を遵守し、戦って死ぬべきである、というものであった。②の場合は、主君と契約して、かれのために戦っているが、①の場合は、十字軍にボランティアで参加しており、主君と契約をして参加しているわけではない。それゆえこの場合は、がんばっても意味がない状況下では逃げてよい、とボネは一面では功利論的に考えるのだった。

(b) 第3巻8章は、指揮官の命令に違反して、あるいは指揮官の許可なしに戦闘し敵を殲滅した騎士は打ち首となるべきか、を問う。軍法違反の問題である。

肯定意見は、〈軍法はまもるべきである。軍法はそういう戦闘を禁じている。ルール違反は、たとえ良い結果をもたらしても、正当化されない。ゆえに、罰せられる〉というものである。

否定意見は、〈①大きな成果をもたらしたら、違反行為はそれによって相殺されるので、打ち首は免れる。②その騎士は、善い意図をもって行為したのだから、意図に免じて許されるべきである〉というものだった。結果と目的とが手段、ルール違反を正当化する、の立場である。

ボネの答えは、次のようなものだった：厳格法に従うと、その騎士は打ち首となる；しかし、王は、人物ないし行為をよく考えて、場合によっては、自分の判断で、あるいは諮問機関からの回答を受けて、全部または一部の罰を免除すべきである；「ときには厳格さよりも、もっとすぐれたものである慈悲の心によって、その騎士は赦免を受ける。[…] 慈悲の心なしには、何が正義かの判断はできない」と。ルールとともに衡平、人間味を尊重した、中庸に立つ議論である。

(c) 第 4 卷 49 章は、王や諸侯が欺瞞や詐欺行為で敵の諸侯を倒すのは妥当か、どういう場合には罪となるか、を問う。戦術としての策略の問題、マキアヴェッリズムにつながる問題である。

肯定意見は、次のようなものである。①目的が正当であるだけでなく、行為の態様も正義に適ったものでなければならない；たとえば、私に借金していながら返済しようとしないうちから財産を強奪したり、かれを殺したりする行為は、正しくない；債務不履行は、裁判によって正式に処理されるべきであるからだ；また、不正な者は神が断罪してくれる；神は、隠れた悪事をも制裁する；ダビデ王は、「私を救ってくれるのは、私の剣ではない」と言っている；人を守るのは神だ；②聖書には「自分が欲しくないことを他人に対しておこなってはならない」とある；誰も、欺瞞によって制裁されることを欲しない；ゆえに、欺瞞は許されない、と。これらは、手段は目的によって正当化されない、の道徳重視論である。

否定意見は、神の意に沿う行為は正しい；聖書の中で神はヨシュア（モーゼの後継者）に、「敵の後方には伏兵を置け」と指示している（ヨシュア記 8-2）；ゆえに、正当なことを実現するためには策略も許される、というものである。⁽²¹⁾

以上の両論に対し、ボネの答えは次のようなものである。敵と折衝する約束をして、そこに来た敵を捕捉したり殺傷することは許されない；信義に反するからである；休戦協定を締結したあと、その休戦中に敵の町を攻略するのは、許されない；誓約は守られなければならないからだ；しか

(21) 実際、『ヨシュア記』第 8 卷 1、2 章には、神がヨシュアに次のように言った、とある：「恐れるな。勇気を出せ。全軍を率いて、アイ〔パレスティナの町〕を攻撃せよ。勝利は目前だ。わたしは、アイの王と全住民をおまえの手に渡した。エリコとその王にしたとおり、アイとその王にもせよ。ただし、今回は奪い取ったものや家畜を自分たちの戦利品としてもよい。町の後方には伏兵を置け」と。

『ヨシュア記』にはその他にも、神がヨシュアに皆殺し・略奪・奴隷化をもおこなわせたと書かれている。また『士師記』には、イスラエルの民による、他国の王の暗殺の例もいくつか見られる。旧約聖書は、かなり血なまぐさい戦争の記録書でもあるのだ。

し、敵がしばしば休息する場所に伏兵を置いてそれによって攻撃し捕虜にすることや、最も不利な場所に布陣するよう敵を仕向けること、たとえば太陽の光が眼を射る位置に敵を陣取らせることは、「健全な良識の産物であり、正しい行為である。[…] 敵に勝つために勤勉と良い進言を得ることによって自力を尽くさずに、神に頼ってはならない。賢明かつ注意深く自分にできることをすれば、自分の力を超えたことは神にゆだねられる。聖書には、そう書いてある」と。約束・誓約を破ることは、重大な道德違反だから許されないが、伏兵等は戦争上の常道としての駆け引きだから許される、との見方である。策略、マキアヴェッリズムの限定的承認である。

(d) 第4巻50章は、宗教上の祝祭日・安息日に戦闘すべきか、を問う。戦争に際して宗教のルールと合理主義とをどう関係させるかの問題である。

肯定意見は、祝祭日は作業を止め神に奉仕する日だから守るべきである。戦闘は、そのような作業に属す。ゆえに戦闘は、すべきでない、というものである。

ボネの答えは、旧約聖書には、祝祭日でも必要な場合には戦うこともやむをえないとある；主イエス自身も安息日に、治療を火急に必要としている病人を癒やしている；これにならって医者たちは、安息日でも治療する；しかし必要がない戦闘は、祝祭日・安息日には避けるべきだ、というものだった。これとの関連でボネは言う、今日の兵士たちは有利だと判断すると、イースターの日でも、四旬節の前の火曜日 (mardi gras) でも、見境なく戦闘を始め、町を攻略し略奪する；ある人は、こういう行為も公共の利益のためならばかまわない、と主張する；しかし今日、公共の利益への配慮がいかほどあるかは、神がよく存じておられる、と。ボネは、利益のため守るべき掟を無視する世相に批判的だったのだ。

(e) 第4巻55章は、敵の騎士によって逮捕され牢獄に入れられた騎士は、策略によって脱獄できるか、を問う。

肯定意見は、①戦争の法は、捕虜を認めている；敗者は、勝者の支配下に入る；ここでは勝者が主人だから、かれに従うべきである；②聖書にはまた、自分が望まないことは他人におこなってはならない、とある；誰も、自分の捕虜が脱獄することを望まないから、脱獄すべきでない；③命を奪われないこととの引き替えで監禁に服しているのだから、生かされている以上、その反対給付はまもるべきで脱獄すべきでない、とする。

否定意見は、①人は、自由を享受することを自然法によって認められている；自然法は、いつでも正しく、善である；ゆえに、捕虜の監禁は自然法に反し、脱獄は自然法にかなう；②暴力・威嚇下でなされた約束は、破棄してもかまわない、とする。前述のようにこの②は、マキアヴェッリの立場でもあった。

ボネ自身の答えは、逮捕・監禁を認め「脱獄しない」と誓約していたのなら、脱獄することは神と人に対する犯罪である；しかし、監禁下で捕虜に対し人間的な扱いがなされていない場合、あるいは捕虜が相当の身代金を提案したのに、かれを獄死させようとして勝者が受け取り拒否をする場合は別だ、というものだった。

ボネは、中世騎士道がまだ盛んである時代の人として、しかも聖職者として、軍事・政治について道徳や聖書の立場を重視した。戦争には大義 (ius ad bellum) が重要で、その戦い方も正しくなければならない (ius in bellum) とする正戦観念もなお強かった。しかしそれでもかれは、騎士道に反する戦い方が蔓延している現状をよく見ていた。そのうえかれは、古代の戦術論を学び、その影響を受けていた。それゆえかれは、戦争遂行上の駆け引きとして、悪どさの低い策略は認めるし、約束破棄・暴力行使を戦術論の常道であるかぎりは認めた。このためかれにおいては、道徳やキリスト教原理と戦争の論理・戦場のマキアヴェッリズムとの相克・緊張が、鮮明に出ているのであった。

クリスティーヌの登場前の時代でも、聖職者においても、古代軍事論の

規定力はここまでであったのである。

（2） クリスティーヌ＝ド＝ピザン——マキアヴェッリに100年先行した女性⁽²²⁾

クリスティーヌ（Christine de Pisan（de Pizan；イタリア名はChristina da Pizzano），1364-1430年頃）は、イタリアに生まれ、パリで活躍した女性文筆家である。彼女の父親トマソ（Tommaso di Benvenuto da Pizzano）はボローニャ大学で医学・占星術を教えていたが、1356年に市の顧問官になるためヴェネツィアに移った。クリスティーヌが生まれた1364年には、トマソは再びボローニャに住み大学で教え始めた。しかしまもなく、学問を尊重したシャルル5世に仕えるため単身でフランスに移住し、1368年には家族を呼び寄せた。クリスティーヌが4歳の時のことである。⁽²³⁾

ボローニャ大学の教授の間では、娘にも父親が自ら英才教育を授ける動きがあった。クリスティーヌもまた、パリで父からそのような教育を受けつつ育った（母はそのような教育に反対だった、とクリスティーヌは述べている）。彼女はその知識を基盤にして、シャルルの宮廷（パリ＝ルーブル）の文書館に所蔵されている多くの古典に親しみながら成長した。15歳で結婚したが、10年後に夫が突如死亡した。彼女は、当初は写本の仕事で自活する道を選ぶ。詩を書くことで悲しみを乗り越えようとしたが、その詩が宮廷人に愛され、彼女は文筆家として生きることになる。⁽²⁴⁾1399年からは有力者から依頼を受けて本を書く仕事 that 定着する。彼女はその収入によって、3人の子供を育て上げ、寡婦である母や独身の姪をも養った。作品数は40

(22) 本「第5章4-（2）」の中身を筆者は、2018年1月16日に早稲田大学法学部における最終講義のテーマにした。

(23) M. G. ムツァレリ『フランス宮廷のイタリア女性』（伊藤亜紀訳、知泉書館、2010年）参照。

(24) クリスティーヌのこの〈失意の中から文筆活動によって再起していく道〉自体、1512年の失脚・入牢という失意状態から古代人との対話、その成果の作品化によって再起していったマキアヴェッリの道と共通している。

冊を越えた。彼女は西洋史上初の、独立した、プロの女性文筆家で、秀でた中世の人文主義者となった。

彼女は最初のフェミニストでもあり、女性の権利擁護の書物を書いている（たとえば、1405年の『女の国』(*Le livre du trésor de la cité de dames*)）。彼女は、1417年頃、王に敵対するブルゴーニュ派が占拠したパリを逃れて修道院に入った。晩年にはジャンヌ＝ダルク（1412年頃-31年）の活躍を聞き、彼女を讃美する詩をつくった⁽²⁵⁾（1429年）。クリスティーヌに対しては、古典からの抜き書きで本をつくる人だとの批判がある。その面は実際ある。しかし彼女は、それを超える問題提起をしてもいる。

ここでは、彼女の政治思想を知る上で重要な、『政治学』(*Livre du corps de policie*, 1407。『国家』とも訳される)と、『戦術論』(*Le livre des fais d'armes et de chevalerie*: 『軍事と騎士道』, 1410)とを主要対象にする。彼女の政治・軍事思想は、100年後のマキアヴェッリのそれに——本稿で描いたマキアヴェッリ像を前提にして比較すればの話だが⁽²⁶⁾——驚くほど接近している⁽²⁷⁾。これは、『政治学』第2部（騎士について）と『戦術論』について、

(25) 1429年8月、ジャンヌ＝ダルクがパリ解放に向かう1ヶ月前の詩である。詩の中でクリスティーヌは、たとえば次のように詠っている：「ジャンヌ＝ダルクは、神に派遣され、天使に導かれつつ、シャルル7世支援にやってきた。これはけっして幻影ではない。彼女は、国王評議会で審査され、実際に戦功をあげているのだから」29 「16歳の少女が、武具の重さも感じず、まるで戦士として育て上げられてきたかのように強く勇敢だということは、奇跡と言うほかない。敵兵は彼女を見ると逃げだし、誰も刃向かおうとしない。こんなことが、多くの目撃者の前で起きているのだ。」35. Renate Blumenfeld-Kosinski (Editor, Translator), *The Selected Writings of Christine de Pizan*, 1997, p. 256 ff.

(26) マキアヴェッリを古代軍事・政治論の伝統との関連で考える発想がなく、もっぱらルネサンス＝イタリアの政情や思潮からのみ解釈する通説では、イタリア＝ルネサンスと結び付かないクリスティーヌを彼と連関づけて考えることなど、当然不可能になる。

(27) クリスティーヌの政治思想の研究は最近活発になっており、マキアヴェッリとの比較の問題意識も出ている（たとえば、Kate Langdon Forhan, *The Political Theory of Christine de Pizan*, 2002）。しかし、本稿が提示したような古典軍事学の伝統との関連において二人を比較考察する作業は、まだない。クリスティーヌ研究

言える。彼女はもちろん、イタリアルネサンスの、マキアヴェッリを取り巻く思想状況や政情とは無縁である。それは、100年後のことである。彼女はまた、軍事・政治の実践体験ももちろん備えていない。それなのに彼女はどのようにして、マキアヴェッリの先駆たりえたか。

それは彼女がマキアヴェッリとまったく同様、フロンティヌスやウエグティウス、そしてウァレリウス＝マキシムス (Valerius Maximus)⁽²⁸⁾らの古代ローマの古典を博く読み、それらから集めた史実・メッセージに依拠して、『政治学』第2部と『戦術論』(両著を合わせばマキアヴェッリ『戦争の技術』に対応する)⁽²⁹⁾で軍事を考え、その基盤に立って『政治学』第1部(マキアヴェッリ『君主論』に対応する)⁽³⁰⁾で君主の政治を論じたからである。(マキアヴェッリと同様)彼女においても——同時代における体験以上に——古典主義、古代軍事論や歴史論から得た知、すなわち人文主義が、彼女をして彼女たらしめたのである。この観点からのクリスティーヌの考察——近時盛んになってきたクリスティーヌ研究でも欠けている——は、

の最近の動向については、矢吹久「クリスティーヌ・ド・ピザンの『国家論』」(『法學研究: 法律・政治・社会』76巻12号、2003年)。

(28) ウァレリウスは、ティベリウス帝 (Tiberius。統治は紀元14- 37年) 時代の歴史家であり、ローマ人のための善き生き方の範例集である *Facta et Dicta Memorabilia* (『記憶に値する行為と言葉』) の著者である。

(29) Craig Taylor, *English Writings on Chivalry and Warfare During the Hundred Years War*, in: Coss, P. & Tyerman, C. (eds.), *Soldiers, Nobles and Gentlemen. Essays in Honour of Maurice Keen*, 2009, p. 76 ff. は、100年戦争でイギリスに敗北を重ねた1400年前後のフランスで、古代ギリシャ・ローマ軍をモデルにした軍事改革(紀律化、王の正規兵確立、王の国家統合力強化等)の聲が高まっていたことを指摘し、クリスティーヌの書物の背景を明らかにしている。そして、同じ様に内戦と対外戦争とで苦しんでいた、15、16世紀のイタリアでも、同様に古代ギリシャ・ローマ軍をモデルにして軍制・政治を改革しようとする動きがあり、これがマキアヴェッリの古代をモデルにした軍事論・政治論へ結晶化していくものであったことをも論じている。

(30) 軍事・政治の各論題ごとに古典からの関連言説・事例を引用して議論する作法も、マキアヴェッリと共通である。フロンティヌスやウエグティウス、そしてウァレリウスとも共通である。

〈軍事論の古典を学んだ者は新しい政治の見方に向かう〉という、本稿の見方を力強く傍証してくれる点でも、われわれにとって重要なのである。

(2-1) 『政治学』

『政治学』は、第1部が君主、第2部が騎士、第3部が市民や庶民、の政治的任務を扱う（この三部構成は、プラトン『国家』の構成——統治者・統治補助者・庶民から成る——を想起させる）。

(2-1-1) 第1部：君主

この第1部の特徴は、(i) 一方で、古代・中世で定番の君主鑑（理想的君主像を示す書）と変わらないかたちで徳性・道徳を重視する伝統的な傾向があること、(ii) しかし他方で、紀律を重視し、運命論で人の主体性を強調し、また科学的・合理的判断を重視する「近代性」があること、にある。とりわけこの(ii)の点で、『政治学』におけるクリスティーヌは、マキアヴェッリに接近している。しかしながら、前述のようにマキアヴェッリの『君主論』等もまた道徳重視の君主鑑としてもあるので、二人は(i)の点でも共通する。

(i)の点について まず強調されているのは、善い君主は、神、公共の利益・国・国土、臣民のために尽くす任務をもつということである。その際クリスティーヌは、上記ウァレリウス＝マキシムスの本、『記憶に値する行為と言葉』を主軸として議論している。彼女は、ウァレリウスが古代のリーダーたち(princes)に見出した「高貴な徳」は、「すべての善い君主と立派な人物の手本であり鑑であるべき」(22)だとする。クリスティーヌは、有徳なローマ人の範例によって、彼女の時代のリーダー(君主・騎士)を導こうとしたのである。この記述形式は、すでに見たように『君主論』や『ディスコルシ』のそれと酷似している。そればかりか次のように、内容的にも両者はかなり重なる：

(a) たとえばクリスティーヌは、スキピオについてその高い徳性が表出した次のようなエピソードを扱っているが、これは、マキアヴェッリも

強調していた(『ディスコルシ』第1巻29章、フロンティヌス『戦術論』4-3-4)。すなわち、スキピオは偉大な軍功をあげたが、そこから私益を得ることは、公共の利益を常に尊重していたので、考えなかった。このためかれは貧しく、その死に際しては、ローマの国家がかれの負債と葬儀費用を立て替えた、と。

(b) クリスティーヌはまた、コンスルであったマルクス(Marcus Turnius)について、次のように言っているが、似た事例はマキアヴェッリにも出てくる(『戦争の技術』25頁のアッティリウスの事例)。すなわち、マルクスたちがサムニウム人の町を包囲しているとき、サムニウム人は、マルクスが貧しいことを知っていたので、買収工作をしてきた。これに対しマルクスは、次のように答えた。「自分は、富に支配されるよりも、富を支配したい。自分は戦場では、敵の虜になりたくもなければ、贈物の虜になりたくもない」と。(21)

彼女はこうした徳性・道徳性重視の立場から古代を讃美し、徳性・道徳性が欠ける同時代を批判する。この点も、マキアヴェッリの姿勢と同じである。

(ii) の点について 道徳論に関係しない箇所では、クリスティーヌはもっとマキアヴェッリと内容的に重なる。

(a) 第1部21章が、その一つである。ここでクリスティーヌは、「善い君主は、温厚で親切である一方、〔愛されるだけでなく〕恐れられもしなければならぬ」と言う。正義を尊重し規律を保つためには、君主は法の違反者を厳正に罰しなければならぬからである。⁽³¹⁾「君主が恐れられない国ではどこでも、真の正義はない。」クリスティーヌのこの考えは、古代の軍事におけるルール・紀律重視に彼女が着目したことの反映だと考えられる。たとえば彼女は、ラケダイモンのクレアルコス——かれのことは本稿で、クセノポン『アナバシス』や、フロンティヌス『戦術論』4-1-17

(31) Forhan (fn. 21), *The Political Theory of Christine de Pizan*, p. 131は正當にも、クリスティーヌの法・正義・紀律重視を論じている。

に出て来た——について言う：クレアルコス「兵士は、死や敵よりも、そのリーダーを恐れなければならない」とよく言っていた、と。死や敵からは免れうるが、軍紀違反に際してそのリーダーからの制裁は免れえないからである。このケースでは、政治と戦争との両方が関わっている。マキアヴェッリが同じ思考であったのは、かれの『君主論』7章、17章にあるとおりである。

(b) 第1部24章は、マキアヴェッリの運命論の先駆として、興味深い。

彼女は、言う。シュラクサイのアルキメデス (Archimedes, 紀元前287-212年) は、町の陥落後自宅に押し入ってきたローマ兵に殺された。かれは生前に、天文学にもとづき「自分が自宅で殺される」と予測し、人びとに伝えていた。予告を聞いた人が、それならどうして自宅から逃げないのかと聞いた。アルキメデスは、人は天体の運動法則からは逃れられないからと答えた、と。クリスティーヌはこのアルキメデスを、次のように批判する、

「アルキメデスは、天〔自然法則〕が人をあらかじめ定められているところに必ず留まらせると考えていたようだ。だとするとアルキメデスは、まちがいをまったく犯さない偉大な学者ではなかったことになる。アルキメデスの考えは、誤っている。人間の魂は、自由に働くものだ。魂は明らかに自由をもっており、人の行為を自由に方向付け動かす。」

クリスティーヌはさらに、次のように言う。確かに肉体は、自然法則に規定されている。夏には暑さにあえぎ、冬には寒さが身にしみる。だが、「自然の法則は、魂に関わることを、すなわち意志の働きを、支配しつくすことはできない」。人の性格も、自然法則にかなり規定されている。しかし、「人は、自然の所産である傾向性をも克服できる」と。この考えは、人は必然性に対してその意志と知の力である程度逆らえるものだとする点で、マキアヴェッリ運命論の3論点、〈運命は専制的な女神である。しかし人間は、①運命の動きの先を読んで備えられる、②運命の変化に即応す

ることによって対応できる、③運命に毅然と立ち向かえる勇気に対抗する）のうちの①・③に関わっている。丸山眞男の言う「自然から作為へ」の変化が、すでに始まっているのである（それは——丸山が言うようには近代の所産ではなく——すでに古代から始まっていた）。

クリスティーヌの次の運命論も、この関連で興味深い：彼女は、『運命論』（*Le Livre de la Mutation de Fortune*, 1400-03）の第1章や『学びの長い道のり』（*Le livre du chemin de long estude*, 1402-03）の序文や『夢想録』（*L'avisio Christine*, 1405）⁽³²⁾等で、運命の絶対的で残酷な支配を強調する。その好例として彼女が挙げているのは、フランスで幸福に暮らしていた彼女を連続して襲った一連の不幸である：彼女が16歳の時（1380年）に、父が仕えていたシャルル5世が突如42歳で病死し、父は異国で職を失い収入が激減した。このため父は失意に陥り1387年頃に死亡した。その2年後、1389年には、幸せな家庭をとともに築きあげていた夫が、流行病で急死した。彼女は25歳で未亡人となったのである。そして夫の死後、ありもしない借金の返済を迫られ、さまざまな裁判で苦しんだ。百年戦争下を寡婦として生きなければならなくなった（これらの出来事は、『夢想録』に詳細に描かれている）。

彼女がこの絶望状況から立ち直れたのは、ボエティウス（Anicius Manlius Torquatus Severinus Boethius, 480-524/525年）の『哲学の慰め』（*De consolazione philosophiae*）によってである。この書には、理性を輝かせて逆境に耐えることによって運命の支配に対する自由を確保する姿勢が鮮明である。『夢想録』第3部15章以下で彼女は、自分のそれまでの人生を理性に導かれつつ振り返る：自分には、不幸が連続して襲ったが幸せも多かった（善き家庭に生まれられ、健康であり、3人の子供を得た）；不幸さえも自分に幸せをもたらした（夫の死によって文筆家として生きられ、多くの知遇を得た）とする。彼女は、自分の人生は全体においては幸福だった、として立ち直るのだった。彼女は、マキアヴェッリにおける上記③（運命

(32) In: (Fn. 24) , *The Selected Writings of Christine de Pizan*.

に毅然と立ち向かえる勇気で対抗する)と同様、理性に支えられた勇気によって運命の打撃に耐えようとしているのだ。逆境をも自分の工夫、知性、勇気によって切り開いてきた古代人たちの醒めた主体的精神、ストア派の不動心 (constantia) の思想を引き継いでいるのである。

(c) ローマの故事を引いて、自然科学の知見が戦場でのリーダーには不可欠だとしている第 1 部 26 章も、マキアヴェッリとの関係で興味深い：コンスルのガルス (Gaius Sulpicius Gallus) は、科学を学んだ人であった。大軍を率いてペルシャに侵攻しているとき、ある晴れ渡った夜 (紀元前 168 年 6 月 21 日。ピュドナ Pydna の戦いの前夜⁽³³⁾) に満月が突然消えてしまった。兵士たちはその不吉さに驚き、反乱を起こす動きさえ見せた。そこでガルスは、月食が天体の運動によって起こる自然現象に過ぎないことを説明し、かれらを安心させた、と。フロンティヌスにも出てきた、ローマの有名な故事にもとづくとはいえ、15 世紀初頭のこの宮廷の女性がこれを取り上げえたということは、彼女が科学的思考をもっていたこと、「世界の脱魔術化」がここに見られることを物語っている。クリスティーヌにおいても、こうした科学的思考は古代の軍事論の所産としてあった (マキアヴェッリにおける月食の事例については、本稿第 2 章の 3 の (2) 参照)。

中世の君主鑑は、君主が軍事・政治を直接指揮することは前提にしていない。戦争は騎士に委ね、行政は大臣に委ね、君主自身は重要事項の報告を受け、また重大案件の会議を主宰するだけである (君主が自ら軍事リーダーとして現場指揮を執った事例は、ヘースティングの戦い、十字軍などで確認できるのだが、上記の関係が一つのパラダイムとしてあったのである)。情況判断のためには、君主も戦術論を修めておく必要はあったが。

この事情を反映してたとえば、君主鑑として有名な、ソールズベリーのジョン (John of Salisbury, c. 1120-1180 年) が書いた政治学の書『ポリクラティクス』 (*The Policraticus*, 1159 年) や、アキナス (Thomas Aquinas,

(33) <https://eclipse.gsfc.nasa.gov/LEhistory/LEhistory.html>

1225年頃-1274年)が書いた『君主の統治について 謹んでキプロス王に捧げる⁽³⁴⁾』では、戦術論は(君主の)課題とはなっていない。これら両著では、フロンティヌスやウエゲティウスらが典拠として重要な位置を占めているのに、である。

これに対し、近世が近づくにつれ、君主は政治のリーダーと戦場のリーダーを兼ねることが常となった。たとえば、イギリスのエドワード1世・2世・3世、ヘンリー5世、フランスのジャン2世、シャルル7世、同8世、教皇国のユリウス2世、スウェーデンのグスタフ2世アドルフ等々である(日本でも武田信玄・上杉謙信・織田信長・徳川家康等がそうだった)。この関係を自分版の「君主鑑」に反映させたのが、マキアヴェッリである。かれは、『君主論』第14章にあったように、「戦いと軍事組織と訓練」の課題こそが君主の第一の任務だとした。この結果、軍事の技術論が政治の技術論としても展開することとなり、暴力的な内乱や陰謀・マキアヴェッリズム、そしてリアルな認識に定礎した思考が、君主の徳性論と並んで、重視されることになった。

この構造のちがいが、クリスティーヌ『政治学』第1部とマキアヴェッリ『君主論』とのちがいである。クリスティーヌ『政治学』第1部においては戦争はまだ、一種の限定戦争的なものだった。したがって君主が直接、その支配の座を賭けて軍事に関わるものではなかった。クリスティーヌの父と夫が仕え、クリスティーヌがその伝記をも書いたシャルル5世も、病弱だったこともあり、戦争は軍師に委ねていた。このため彼女の『政治学』第1部は、内政向きで、道徳論を軸にした伝統に留まったのである。マキアヴェッリの同時代においてすら、エラスムスの君主鑑『キリスト教君主教育論』(*Institutio principis christiani*, 1516年)は、クリスティーヌの『政治学』第1部と同様な位置・傾向にあった。

(34) アクィナス『君主の統治について』(柴田平三郎訳、慶應義塾大学出版会、2005年。岩波文庫、2009年)。

(2-1-2) 第 2 部：騎士

上の述べた事情の中で、中世において戦術・統治術の習得を主要課題としたのは主として、君主から軍事・統治を委ねられる騎士たちだった。それゆえ、この騎士を扱った『政治学』第 2 部は、軍事と政治とが結合する場として、マキアヴェッリの『戦争の技術』や『ディスコルシ』、『君主論』等に、内容が一層似ることとなる（この第 2 部が、クリスティーヌがマキアヴェッリをとくに先取りする箇所である）。ここでは、「どのようにして戦いにうまく勝つか」の考察、そのための合理的思考や策略（勝つためには手段を選ばないとのマキアヴェッリズム）の重視が特徴的である。しかも議論は、古代ローマの、ウァレリウス＝マキシムス、フロンティヌス、ウエグティウスらの古典から事例を使って展開している。マキアヴェッリにおけると同様、古代の軍事論に定礎したことが、彼女の軍事・政治の思想と思考を形作っているのである。

この第 2 部でクリスティーヌは、騎士の条件として次の六つを挙げる：(a) 戦争・武器・軍事技術を心がけ、軍紀を尊重すること、(b) 勇気・剛毅・不動の精神をもつこと、(c) 友情・信義・相互の奉仕を尊ぶこと、(d) 有徳であり、信義誠実で約束をまもること、(e) 名誉を尊ぶこと、(f) 軍事において賢明であること、すなわち敵に対し効果的に行動し、部下から良い助言を得、戦術に巧みであること、である。クリスティーヌは、これらそれぞれを古代ローマ人の事例を挙げて、説明する。

(a) についてはクリスティーヌは、マキアヴェッリと同様、軍紀遵守の徹底を強調する。軍法違反者は、厳しく罰せられる。ウァレリウス＝マキシムスは、ローマが世界を征服したのは、「紀律を尊重したからであり、このことがなかったら、世界征服はありえなかっただろう」と結論付けている、とする。(2-6) マキアヴェッリ等に見てきた議論である。

(b) については、騎士は自分の側に実際に大義名分があれば、暴力に訴えて戦ってよい；自分が正しいのに、攻撃されて防衛しないのは臆病に他ならない、とする。(2-9)

(c) に関しては(2-13)、コンスル(紀元前255年)のレグルス(Atilius Regulus)の事例が印象的である。レグルスは、カルタゴの捕虜となった。その際かれは、ローマに不利な和平協定を強要され、「これをレグルス自身がローマに帰って元老院に認めさせえたら、レグルスは釈放される」との条件下で、交渉のためローマに帰された。かれはローマに帰ったのち、こんな協定は認めるべきでないとして元老院を説得したあと、自分は約束どおりカルタゴに戻って、惨殺された。マキアヴェッリなら、約束の破棄を主張するケースだ。かれとは異なってクリスティーンは、この第2部でも道徳(「約束は守られるべし」)の重視を前面に出すのであった(しかしこれは、古代ローマ人の生き様を評価する文脈上でのことであった)。

本第2部においてとくに興味深いのは、(f)の、軍事における賢明さについての議論である(2-18以下)。ここにはその一環として、策略の事例が豊富に提示されている。軍事におけるこれら策略が政治に応用されたのが、マキアヴェッリズムの議論である。以下、その事例を紹介しておく。

①アテネの指揮官フィロスツラツス(Philostratus)は、メガラとの戦争中、略奪に来たメガラ軍を待ち伏せによって殲滅し、その敵の船に敵の服を着せたアテネ兵と、略奪物となるはずのアテネの女性たちとを乗せてメガラに向けて出帆し、その町に入港した。メガラの住民たちは、自軍が無事帰還しかつ戦利品が豊かであることを喜んで、こぞって港に迎えに来た。フィロスツラツスは、上陸してその住民たちを効率よく殺害しメガラの町を占領した。(2-18)

②ローマの王タルクイニウスは、敵のガビ族の町を落とせなかった。このときかれの息子は自発的に次の行為に出た。すなわち息子は、自分を傷つけたのち、ガビ族の町に行き、「父から暴行を受け追放されたので、その仕返しをしたい」と申し出た。敵はこれを信用して受け入れ、やがて息子を指揮官に就けた。息子は、その地位を利用してガビ族の要人たちを殺害し、この町を父に手渡した。(2-19)

③カンナエの戦いにおいて、ハンニバルは次のような戦術をとった。す

なわち、土埃を巻き上げる風と太陽の光線とを背に受けるように布陣した。また、一部の兵をわざと逃亡させ、それを追ってきたローマ兵を伏兵によって殺害した。さらに、一部の兵士を、降伏を装わせてローマの陣内に入り込ませた；その兵士たちは、隠していた短剣でローマ兵を背後から攻撃し、殺害した。(2-19) 科学的・合理的な観察と、欺瞞の策略利用とである。

④敵のスパイたちを捕まえ、その着物を奪い自軍の兵士に着せて敵のもとにいかせる。敵のスパイになりすましたその兵士たちは敵の指揮官に、今こそ攻撃のチャンスだと進軍を促す。この促しを受け入れて進軍してきた敵を、伏兵によって殲滅する。(2-20)

⑤ローマが少数でサムニウム人の大軍と開戦するに当たって、ローマの兵士たちは敵の数の多さにひるんだ。すると司令官のフルウィウス (Fulvius Nobilior) は、兵士たちを集めて演説し、「敵の一師団 (7000人近い敵の部隊) を既に密かに買収済みであり、戦闘が始まったら、かれらは寝返って敵を攻撃する」と述べ、その証拠として「寝返りの報償としてかれらに提供する予定の金だ」と言いつつ大金を兵士たちに示した。これを信じた兵士たちは、勝利を確信して戦い、実際に勝利した。(2-21) 嘘をついて兵士を勇気付けたのである。この行為をクリスティーヌは、「この賢い、高貴なリーダーは、知恵と説得によって、兵士の恐怖を確信と勇気に変えた」(2-10) と評価する。軍事というより政治におけるマキアヴェッリズムであり、不道德な策略を味方に対して使って統合の効果をあげた事例である。

これら策略は、上で (c) の信義尊重や (d) の道徳尊重とは矛盾する。しかし、それでも、伝統的な四元徳中の「賢明」の徳の発動としてある。

(2-2) 『戦術論』

クリスティーヌは1410年に、『戦術論』を書いた。この本は、西欧史上、紀元4世紀のウェグティウスの『軍事学』以来1000年目にして書かれた軍

学書である。しかも、フランス宮廷の一女性が書いたのだった。この書は、彼女の死後も写本で広まったが、1488年にフランス語印刷本が、1489年に英語印刷本が出て英仏で博く読まれ、ヘンリー8世も愛読したという。写本・印刷本には女性への偏見から、彼女の名を男性名にしたり削ったりしたものもあった（マキアヴェッリの『戦争の技術』も、1521年に出版され、Lipsius等に影響を与えたのであって、この点でも二人はよく似ている⁽³⁵⁾）。

この本は、彼女の『政治学』中の、戦術に関する箇所を拡大したものであり、使われている事例も一部重なっている。クリスティーヌはここで、ウェグティウス、フロンティヌス、ウェアリウス等は、名を明示して引用しつつ議論している。ウェグティウスは軍備・野営・行軍や軍の組織運営・紀律に関し、フロンティヌスは戦術の工夫に関して、使っている。彼女はまた、ボネやレニャーノにも大きく依存しているが、かれらの名は示していない（ただし第3・4部は、ボネを暗示している）。この本は、かれらからの引用文を次から次へと並べていくかたちで書かれた本である。

このように『戦術論』では、古代ローマのリーダーたちの行為態様の描写が中心となる。ここでもかれらの範例を今日の「君主」に示すことが軸となっている。ただ、クリスティーヌはこの本でも、君主はその身の安全を第一とすべきだから戦場に出るべきでなく、実戦は軍事の専門家に委ね、宮廷にいて軍事の指図をすべきだ、とする（21-23）。しかしそれでもこの『戦術論』は、君主向けにも書かれている。

この延長線上で君主と軍事との結びつきがさらに進み、君主鑑上の（君主は軍事を指導しないという）中世的パラダイムが崩れれば、マキアヴェッリ『君主論』の成立となる。なぜなら、君主が——統治を担うとともに——騎士たちと同じく戦闘に参加し指揮官となるようになれば、君主は軍

(35) Melissa A. Biederman, The question of authorship of Christine de Pizan's war manual, *Le livre des fais d'armes et de chevalerie*, 1991, <http://lib.dr.iastate.edu/rtd/163/>; Charity Cannon Willard, Christine de Pizan on the Art of Warfare, in Marilyn Desmond ed., *Christine de Pizan and the Categories of Difference* (Medieval Cultures), 1998.

事論を真剣に学び実戦にそれを応用するようになる；そしてそれとともに、その軍事論の思考でもって政治をも考え処理するようになる；少なくとも、軍事論を学んだ上で君主論を講じる者は、軍事論の思考で君主論をも思考するようになる；こうして、軍事論の思考は、政治の思考を性格づけることになる、からである。何度も述べたように、軍事と政治とは論理構造を共通にしている（とくに友と敵の関係）からそうなるのだ。この動きが、クリスティーヌ『戦術論』においてすでに始まっていたのであった。

さて、ここでクリスティーヌは、戦争は不正が犯された場合に法と正義を守るためにおこなうもの⁽³⁶⁾だとはする。戦争は、悪人を懲罰し、奪われた財産や地位、名誉を取り戻して、教会・祖国・臣下・臣民・他の君主を守るためにおこなう、君主の正当な行為である、と。中世的正戦論、*ius ad bellum* の考えだ。しかし彼女は、その遂行のための手段としては、かなり悪辣な手をも許容する。以下では、策略行使の諸事例を見よう。

(a) 正面戦を避け、敵の食糧を操作して敵を倒す

①クリスティーヌによれば、カエサルは、良い医師が病気に対してするのと同様、良い指揮官は敵に対しては鉄で打倒する前に空腹で打倒せよ、と述べていた。(101) 先にフロンティヌスに見た、「戦わずして勝つ」である。

②クリスティーヌは、ウェゲティウスを引用して、城塞都市を攻めるには、収穫の時期が良い；敵の畑の小麦等を利用できるし、それを奪えば、

(36) 軍事論の書を書いているとはいえ、彼女は好戦的であったわけではない。彼女が当時の戦争の暴虐性を批判していたことは、先に1407年の『政治学』からの引用で見たとおりである。彼女はまた、『女の国』の第9章で、戦争の残虐さを批判するとともに、王妃たちには王たちがおこなう戦争をやめさせ平和を回復する使命があることを強調している。彼女は、正戦論の立場から、正義にかなう、やむを得ずしておこなう戦争は肯定したのだ。これに対しマキャヴェッリは、正戦論はなくなっているが、それでも戦争はやむを得ずしておこなうものではあった。

立て籠もる敵を饑餓に陥れられるからである、とする。(115) かなり悪辣な策略行使の事例である。

③ファビウス (Fabius Maximus) の事例：かれはカプアの町を攻略するに際して、まず〈町を落とすことではなく、嫌がらせすることが目標だ〉と見せかけるため、町の周囲の小麦畑を荒らし回ったあと、別の地域に軍を移動させた；するとカプアの住民たちは、嫌がらせはもう終わったと判断して、荒らされたその畑に備蓄用の小麦を種麦として播いた；次の年の食糧を確保する必要があったからである；これを確認したファビウスは、軍を戻してカプアの町を攻撃した。町は、かなりの小麦を種麦として播いてしまったので食糧不足を来たし、まもなく陥落した。(96) これも、かなり悪辣な策略である。

④アレクサンドロス大王の事例：大王は、ロイカディアの町を攻略したかった；大王は、この町が食糧を豊富に備蓄していることを知っていたので、まず近辺の町々を攻略し、それらの住民がロイカディアの町に逃げるよう仕向けた；こうして避難民であふれたロイカディアの町は、食糧不足を来たして陥落した。(96) これもまた、知恵を活用した、しかしかなり汚い手である。

(b) 敵を嘘でだます

①カルタゴのハミルカル (Hamilcar) の例：かれは、ローマ人が敵方の反乱兵を歓迎することをよく知っていたので、もっとも忠実な軍人を多数選んで、反乱兵を装わせてローマ軍に逃げ込ませた；案の定、ローマ軍はこれを受け入れた；このカルタゴ兵たちはローマ軍の陣営内で、チャンスを見つけてローマ兵たちを襲い殺害した。(97) 敵が示す寛大さや信頼を利用する、汚いやり方である。

②ローマの司令官リウィウス (Livius) は、タレンツムを守っているとき、包囲しているハスドルバルに使者を送って、町を明け渡すと申し出た；この交渉の最中、敵がそのため油断した時、リウィウスは撃って出て、カルタゴ軍を破りハスドルバルをも殺害した。(98) これも、ボネで

あれば認めない、道義違反の策略、政治的マキアヴェッリズムである。

③クリスティーヌは休戦協定について、言う：敵の正当な休戦提案はむげに拒否すべきではない；しかし、それを使つただまし打ちに遭わないよう注意する必要がある；敵は、休戦交渉で時を稼ぎ、援軍を待つとか、こちらの食糧が尽きるのを待つとかする；このためには、相手をよく見、信頼できるか・本気かを慎重に判断しなければならない；こちらから送る交渉要員が寝返ることもあるので、指揮官と血を同じくする親近者や、指揮官が高い地位に就けた者で自分と友情を交わした者を送るべきである、と (58 f.)。政治におけるマキアヴェッリズム行使が、テーマである。ここでは人間不信の面が、軍事を考える際のクリスティーヌの根底で働いてもいる。

(c) 機転で問題を処理する

①カルタゴのハンノ (Hanno) は、4千人のガリア兵が敵のローマ側に移ろうとしているのを知って、工夫して (夕刻に多数のガリア兵が糧秣を集めるため野に出るとの情報を敵に送り)、ローマ兵にかれらを待ち伏せさせて討たせた (97)。先にフロンティヌスに見た事例である。

②ローマ軍が使っていた外国人傭兵隊が、「敵方に移る」と言って敵の陣地に向かって離脱していった；あるローマの指揮官は、その隊列に続くかたちで、全軍を移動させた；すると敵は、ローマ軍の攻撃が始まったと誤解して、先頭に立って近づいてくる (寝返った) 外国人傭兵たちを、ローマ軍中のさきがけ部隊だと思って攻撃し、全滅させた；敵も多くが死んだので、一石二鳥で傭兵たちはローマの役に立った。これも、先に見たところである。

(d) 毒の使用

海戦で敵の船を攻撃するとき、傷を受けたら致命的となる猛毒^{やじり}を鎌や刃に付けることについては、クリスティーヌは、「しかしそのようなものについては、それがもたらす結果のひどさに鑑みて、ここで扱うべきではない。そういうものは、禁止され呪われるべきだ。キリスト教徒である兵士

は、戦争の法に反するそのような非人間的な武器を使うべきではないから、この毒について本に書くことや、他のかたちで記録に残すことは、許されるべきでない」(141)と述べている。今日の化学兵器禁止に似た姿勢である。軍事における策略を許容するクリスティーヌも、あまりにも残酷なものは認めない。ここでは、*ius in bellum* の羈束が、まだ強いのである。

以上を要するに、

i) クリスティーヌの『政治学』・『戦術論』にも明確に出ている傾向として、科学的・合理的思考、リーダーの徳性重視・道徳尊重、紀律化重視、策略重視等がある。彼女は、依拠した古典、フロンティヌス、ウエグティウス、そしてウァレリウス＝マキシムスらの本からこれらを学び取った。このため、古代人の思考が彼女の思考を規定した。この点は、マキアヴェッリにも特徴的である。

ii) キリスト教の影響下にあった(ボネ等の中世的)正戦論や騎士道では、戦争に大義名分があるだけでなく、戦い方も正しくなければならないとされていた。しかし戦い方の正しさ(*ius in bellum*)に関しては、クリスティーヌにあっては、彼女が古代的な軍事を集中して勉強したことにより、かなり崩れつつある。彼女は、(ボネが認めていた)伏兵などを使う戦術だけでなく、(ボネが禁じていた)嘘の約束を利用することも、戦術として当然のものとして許容・奨励している。

そして『戦術論』において嘘は、味方に対しても使われていた。彼女は、指揮官が兵士に嘘をついて戦わせても、それによって勝利しさえすれば正当性が付与される、と考える。政治的マキアヴェッリズムが、こま⁽³⁷⁾で出てきているのである。

(37) クリスティーヌが策略を、戦争だけでなく政治にも使うとしていたことは、『政治学』にも出ていた。タルクイニウスが息子を使ってガビ族の町を攻略した2-19は、工作員・スパイを使う手であり、フルウィウスが兵士たちに嘘の演説をした

正戦観念・中世的な戦争観は、マキアヴェッリにいたると、ほぼ崩れる（もちろん、まったく崩れるわけではなく、既述のように、国家建設・維持のためといった目的の崇高性や、最低限の道徳・法の尊重が前提条件としてある）。かれにおいては、目的のためには多少の反道徳・違法も許されるとした古代的な戦争観がストレイトに再生するからだ（そしてそれが、政治の論理ともなった）。

iii) クリスティーナにおいてこのような策略・マキアヴェッリズムは、彼女が他方で徳性・正義・道徳性を強調していることとどう関係するか。彼女は、古代からの伝統に従って、第一に、戦術を活用する知恵も、四元徳（賢明、勇気、正義、不動心）の一つである賢明さに属すると考えていた（すでに四元徳においても、道徳性と策略・マキアヴェッリズムとは両立しているのである）。第二に、彼女もまた戦争には、正義にかなない大義名分がある者には、多少の反道徳・違法も許されると考えていた。第三に、彼女もまた、マキアヴェッリと同様、「清濁併せ呑む」思考の人であった。近代人的な、「原理的矛盾」に敏感な人ではなかったのである。

iv) クリスティーナの生きたフランスは、マキアヴェッリの生きたイタリアによく似た、対外戦争と内乱とに明け暮れる状況下にあった。フランスの場合、1338年から百年戦争が始まり、イギリス軍に立て続けに敗北し、イギリス軍はフランス国内を荒らし回った。しかもフランス貴族たちは、アルマニャック派とブルゴーニュ派とに分かれ、その対立をイギリスが利用することによって、激しい内乱状態が続いていた。1378年からは教会の分裂が決定的となり、教会の権威が失墜していた。1346年頃から1350年頃にかけてフランスでもペストが大流行し、多くの死者が出た。天候不順で不作、饑餓が続いた。

そして注28で論じたように、こうした状況下で、イギリスに負け続けたフランスでは、軍事・政治の改革の必要が説かれ、モデルとして古代ギ

2-21は、政治的な嘘で民衆を引っ張っていく手である。しかしこれらは『政治学』では、騎士向けに書かれた策略提言であった。

リシャ・ローマの軍隊と国家とのあり方が評価された。クリスティーヌは、その雰囲気の中で古代の文献を広く読んで軍事や政治のあり方を探ろうとし、倫理的に退廃した現代を古代の偉大さによって批判し方向付けようとした。

マキアヴェッリに先立つ時代以降のイタリアも内乱・対外戦争の同じ情況下で、古代ギリシャ・ローマの軍隊と国家をモデルにした改革が模索されていた。

クリスティーヌとマキアヴェッリがともに、古代軍事論・政治論の世界に入り込み、古代人の有り様をモデルにして改革提言をしたことは、それゆえ偶然の一致ではなかったのだ。クリスティーヌは、1412-14年に書いた『平和論』(Livres de paix) では、フランスに統合と平和をもたらす君主としてのフランス王への期待を表したのであったが、⁽³⁸⁾同様のかたちでマキアヴェッリは『君主論』等において、君主による統合国家をイタリアで求めたのであった。これも、相似た情況の所産である。

われわれはクリスティーヌをマキアヴェッリに100年先行した女性として位置づけたが、以上の点からして、これはけっして誇大広告ではなかったのだ。

全体の結び

マキアヴェッリは、有名なわりに伝記が書きにくい人である。かれの場合、中身のある伝記は、かれがフィレンツェ共和国書記官に抜擢された1498年、29歳の時からしか書き始められない。それまでの時期は史料に乏しく（父親のメモが少々ある程度である）、体験の中身も思想の形成過程も

(38) 彼女は古代ローマ共和国や彼女の同時代のヴェネチアに見られた、貴族主軸の共和国についても、安定した政治が長年続いたことを評価している（第3巻12章）。しかし彼女自身は、君主主義者であるが、専制政治支持ではなく、君主が善き助言者をもち、かつ自制することを求める。

分らない。しかもかれは1512年、43歳の時に共和国が瓦解し失脚し、政治の表舞台から去ってしまう。

そこでマキアヴェッリ論者は、伝記や思想解説を面白くするためにはきまって次の道をとる。すなわち、まず①ルネサンス期イタリアの、各自治都市や王国の内的・対外的な覇権争い・内乱と、外国勢のイタリア侵略とが呈する戦国時代的な混迷の軍事・政治、を描く。次に②その中で、1498年から1512年のフィレンツェ共和国時代におけるマキアヴェッリの外交・軍事面での活躍ぶりを追う。とくに強調するのは、歴史上有名な政治史上の人物、チェーザレ・ボルジア、ルイ12世、皇帝マクシミリアン1世らとのマキアヴェッリの接触の態様である。そして、③それと関連させるかたちで、マキアヴェッリの著作・政治思想の解説に入る。しかしこの際に論者が使うのは、たいていは『君主論』だけである。なぜならかれらは、〈マキアヴェッリはもっぱら上記の時代の雰囲気の中での直接の政治体験を結晶化させて『君主論』を書いた；そのような文脈で書かれたのは『君主論』だけだ〉と思い込んでいるからである（かれの他の著作は、上記の時代イメージとの関連が見出されないから、政治論ではオミットされる。せいぜい『ディスコルシ』が、マキアヴェッリの共和国思想が表明された本として一部の論者によって使われるだけである）。

この結果多くのマキアヴェッリ論は、「内乱・戦争・奢侈・非道徳で混迷したイタリア」を強調し、その「秩序崩壊」のイメージでマキアヴェッリ像を構成したうえで、この時代に横行した暴力やマキアヴェッリズムをマキアヴェッリに投射し、『君主論』とその著者とを、暴力、マキアヴェッリズム、シニシズム、リアリズム、性悪論の書物であり人物だとする。そしてこの〈マキアヴェッリストで性悪論的であるマキアヴェッリ〉を投影しつつ、マキアヴェッリの時代やかれと交流した人物を論じるので、これらも背徳・マキアヴェッリズム・暴力性に染まったものとして描くことになる。

加えて、ルネサンス期イタリアは比較的安定していた中世とは異質の政

治情状況下にあったと見、またルネサンスは科学と「個人主義」の近代だと見るから（ブルクハルトの見方がその典型である）、この時代の人であるマキアヴェッリの思想を、中世までの伝統を断ち切った近代的なものとする。こうして多くのマキアヴェッリ論者は、マキアヴェッリもかれが生きたルネサンス時代も、過去と断絶したかたちで、突然変異で出現したかのよう描いてきた。

この種のマキアヴェッリ論は、記述をドラマティックにする効果はもつ。しかしこれでいくと、マキアヴェッリが古代のギリシャ・ローマの世界に没入して思想形成した点は、視野に入っていない。本稿で見たように、マキアヴェッリの作品、『ディスコルシ』や『戦争の技術』——さらには『君主論』さえ——を読めば、古代のリーダーたちがもつ徳性をマキアヴェッリが素直に讃美しており、そこから真摯に学ぼうとし、それに依拠して現代を批判していることが分かるはずなのだが、人びとはマキアヴェッリのそういう記述に出会っても、「あのマキアヴェッリが素直な心で古代を讃美するはずがない。まじめさを装ったこの書き方には、何か裏があるのだ」として片付けてしまうのである。

マキアヴェッリを政治・外交活動中心に、換言すれば同時代の政情やリーダーたちとの関わりから、理解しようとする考察は、それを推し進めてかれに接近しようとするほどマキアヴェッリから遠離る、という関係にあるのだ。

人はまた、『君主論』を読み、そこに展開するマキアヴェッリズムやもののリアルな見方に着目する。しかし人はその際、それらが古代のギリシャ・ローマの軍事の世界（歴史書や戦術論書）では自明のものとして発達していたのであり、それをマキアヴェッリが深く学びつつ『君主論』や『ディスコルシ』を書いたという事実は⁽³⁹⁾気付かない。このため、ここで

(39) 古代の軍事論の研究が未発達だからであり、かつ、政治学者・政治思想史家のほとんどが近代主義的発想（伝統が近代の中軸を成していることを見ず、伝統を破るものとして「近代」を考える発想）につきまとわれ続けているからである。

も「こんな合理的・マキアヴェッリズム的な思考をする人物は、思想史上の突然変異だ」、「(それまでの中世の思考と対極にあるものとしてのルネサンスが生み出した)まさに伝統と決別した、革新的な近代政治思想の出現だ」と考えてしまう。

ルネサンス期の時代背景との関連においてマキアヴェッリを描く論述傾向は、マキアヴェッリの作品を丹念に読んで議論しないことをも生じさせてきた。マキアヴェッリを同時代の動きや周辺人物との関係から論じようとするのであれば、作品を丹念に読まなくとも、マキアヴェッリ論は書き進められる。上記のように、要所要所で『君主論』、さらにはせいぜい『ディスコルシ』の有名箇所を引用すれば足りる。古典の勉強がマキアヴェッリの諸作品を個々の点で、無意識下にどう規定しているかといった問題意識がなければ、作品の綿密な分析、先行思想との関連付けは必要なくなる。

近時の英米では、ポーコック、スキナー、ヴィローリらの問題提起以来、『ディスコルシ』に着目しマキアヴェッリの共和主義や祖国愛を評価する動きが強まっている。しかしここにおいても、饒舌な議論の割にはマキアヴェッリからの引用、その分析は少なく、引用されるのはやはり、前からおなじみの箇所ばかりである。同時代のシヴィック＝ヒューマニズム、その歴史的文脈、フィレンツェにおける共和主義の流れを描いてマキアヴェッリをその中に置けばかれの思想が浮かび上がるとする点で、発想は上記の記述傾向と同じだからであろう（「共和主義」や「祖国愛」の視点だけでは、テーマが大きすぎ、マキアヴェッリの細かい議論は検討の必要がなくなるという点もある）。

ある人物の思想を、時代背景、その中で本人の体験、同時代人の影響との関連で理解しようとするのは、確かに思想史の常道ではある。しかし人物は、もちろん時代に還元しきれるものではない。とくに過去の思想家や芸術家の中には、時代を離れて没入していった遠い世界からの濃厚な影響を核にして活動している人物が少なくない。マキアヴェッリも、その一

人だ。このような人物をもつばら時代背景との関わりにおいて解釈することで足りるとするのであれば、見逃してしまうことがらが多くなる。

上の問題性は、同時代のドイツにおいてマルティン＝ルターがラテン語聖書に出あい、その基盤上に新しい信仰のあり方を固めていったケースを考えれば、明らかだろう。教皇庁は、聖書を読むことを制限していた。この聖書にルターはエルフルト大学の学生時代に図書館で出あって、正しい信仰のあり方をそこに見出した。そしてそれによって思想形成をするとともに、時代批判を展開し教会の改革運動に向かった。このルターを、聖書、すなわちこれも古代に属す原典との結びつきを抜きにして、かれの同時代の教会の腐敗・乱れた宗教政治や、ザクセンの経済・政治状況からだけで理解しようなどとは、誰も考えないだろう。

マキアヴェッリの同時代のフィレンツェにおいて、その共和政とも関係しつつ作品を産み出していった人びと、たとえばミケランジェロ、ボッティチェリ、ダ＝ヴィンチ、さらにはラファエロのケースも同様である。かれらはもちろん、同時代の思潮、時代体験、同時代人からの影響を受けつつ成長した。しかしその作品を理解するには——かれらの個性・天才性の考察に加えて——かれらが古代の美術や哲学に接して、それらからどのような影響を受けたかの考察が欠かせない。実際、ミケランジェロ、ボッティチェリ、ダ＝ヴィンチはメディチ家に保護され、サン＝マルコ修道院庭園の古代彫刻群に出会って大きな影響を受けたのだった。ラファエロは、古代ローマの遺物を監督する官職に就き、また古代の哲学をも学んだ。こうした古代体験がかれらにもたらしたものが何であったかが、作品理解には欠かせない。

ある人が古代に向かう際に、かれの同時代の思潮が古代を見る眼を規定し、独自の歴史書や文学書の読み方、芸術作品の見方をもたらす、ということはある。しかし同時に人によっては、かれが魅了され没入していった古代・古典自体が、新しい感覚を生み出し、かれの思想や作品を深く性格付け、それらが後世への強力なメッセージとなるということも起こりう

る。今の時代が古代への眼をつくるとともに、古代が今の時代への眼をつくり未来を方向付ける。

マキアヴェッリもまた、同時代体験を深めるとともに、古代人の世界に没入し、そのことによって、同時代の政治やパラダイムからだけでは理解できないかたちで思想形成をした面をももつ。かれにおいても、そうした古代体験が同時代批判や、問題の新たな認識を可能にした。この種の古代没入の点で、ルターについて「聖書主義」、ラファエロやミケランジェロについて「古典主義」を言うなら、マキアヴェッリもまた「原典主義」・「古典主義」を言わなければならない。

さて、先に述べたような記述態様に陥りがちな、昨今のたいていの政治思想史学者は、そのことが原因して、同時に次のような誤った認識にも陥りがちである。マキアヴェッリを「リアリズムに立脚して近代政治学を創設した人」と見、かつ、そうしたことがかれに可能だったのは、ルネサンス期の特徴としての、人間の再発見、科学の発達、欲望と暴力・欺瞞の現実世界がかれの思想に反映したからだ、と見る誤りに。

その際、「人間の再発見」については、かれらは次のように言う：ルネサンスは、中世の神中心から人間中心に関心を移した。このことが、人間をその自然性、本性に即して考えることを可能にした。この状況下でマキアヴェッリは、人間の本性である欲望・暴力・欺瞞と向きあった。そしてそれを、政治論の基礎にした。こうしてリアリズムの政治思想が出現した、と。

また「科学」については、次のように言う：ルネサンスが発達させた科学は、リアルに現実・対象を見ることを可能にした。マキアヴェッリはこの状況下で政治における人間事象を体験したので、人間の欲望・暴力・欺瞞を直視できたのだ、と。

さらに「ルネサンス期イタリア」については、次のように言う：欲望・暴力・欺瞞が渦巻く、繁栄と戦国の時代状況下であって、その体験を思想

化したマキアヴェッリは、それを反映させて、リアリズム、パワー＝ポリティックスの政治学を展開した、と。

しかし、本当にそうだろうか。これら3点を検討しよう。

(a) 人間の本性論 ルネサンス期における人間の再発見が、欲望・暴力・欺瞞等の醜悪なものや、人生の苦や暗部をテーマした人間描写に向かわせたという点は、実際にはさほど起こっていない。喜劇やユーモア作品中の、欲望や策略も、古代以来見られるところのものである。当時の絵画において顕著なように、人間の再発見は肉体のヨリ現実に近い描写、個性や感情表出の豊かな表現を強めたものの、それは、古代ギリシャの古典主義の作品に見られたのと同様、調和のとれた美しさを保ちながら個性や感情を表現する方向に向かう動き、理想主義的で精神性を重視する方向においてであった。ミケランジェロとボッティチュリや、ラファエロ、ダヴィンチには、古代彫刻の端正で理想化された人間描写の影響をうけた人間描写（古典主義）が特徴である。作風が変わった後の、ボッティチュリとミケランジェロにおいてさえ、欲望・暴力・欺瞞等の醜悪さや人生の暗部をことさら前面に押し出す「近代リアリズム」ではない。

われわれが見てきたようにマキアヴェッリの思想全体も、実際には同様な方向にあるものだった。マキアヴェッリは、上記の同時代人と同じように、フィレンツェの古典主義・人文主義の中で育ち、政治的にはフィレンツェ共和国確立のために活動したのだ。

(b) 科学の発達 確かに芸術でもダヴィンチやミケランジェロらの作品において、科学は大きな位置を占めている。2人は解剖に関心を寄せ（ラファエロもこれを学んだ）、人間の肉体の実際の構造を彫刻・絵画に反映させた。遠近法の活用や、背景の自然の精密な描写も、かつてよりは絵画を一層現実に近付けた。

だが、ダヴィンチやミケランジェロがそれを踏まえてつくった作品を近代リアリズムだと性格づける人は、いないだろう。かれらは、科学によって人間の美しさ、さらにはその人間をつくった神の偉大さを明らかにし

ようとしたという面もある。そのためかれらは、美しいプロポーションやバランスを研究した。科学に根ざした人間讃美と理想主義である。このように、ルネサンスの科学は、もののリアルな見方はもたらすが、近代リアリズムそのものの表出物ではない。ルネサンス期に科学が発達し始めたからといって、直ちに近代リアリズムが出現した、とするのは論理飛躍に他ならぬ。

戦術論においても、同様である。ルネサンス期には古代ローマの戦術論を軸に、戦争の仕方に理論・科学が重視された。マキアヴェッリは、それを政治の世界に応用した。しかし古代の戦術論は、もののリアルな見方とっていても、リアリズムという世界観そのものではない。そこには、人間の弱さ・エゴイズムのリアルな認識とともに、徳性や大義への感覚の確認、それを踏まえた美德論・道徳尊重の議論があった。マキアヴェッリによる戦術論の政治学への応用が示す特徴も、同様である。

(c) 時代状況 同時期に欲望と暴力・欺瞞が渦巻いていたという現実、常にその時代の思想家を欲望と暴力・欺瞞を肯定する思想家へと仕向けていく、といったものではない。マキアヴェッリについて言えば、それに対する反発が顕著である。かれは、古代のリーダーたちの行為態様をモデルとし、そのモデルと対比することによって、同時代の軍事・政治のリーダーたち、とくに僭主たち（と、決断ができないフィレンツェ政庁自体と）を批判したのだった。それは、ルターが腐敗した教会を聖書に依拠して批判したのと同じ動きである。しかも、そういう「欲望や暴力の現実」からマキアヴェッリを説明するのであれば、リアルな認識・リアリスティックな描写の面は説明できても、かれがなぜ他方で「リーダは、有徳でなければならず、かつ道徳的に振る舞うべきだ」と強調するのかは説明できない。

要するに、ホイジンガが指摘しているように、「ルネッサンスの澄んだ
 明るさは決してリアリズムではない」⁽⁴⁰⁾のである。

(40) 「ルネサンスとリアリズム」(『ホイジンガ選集』第4巻、里見元一郎他訳、河

では、近代リアリズムは、いつから始まるか。

①まず絵画では、もっと後の、100年後のバロック期からだと言えよう。生身の人間に接近した、カラヴァッジオ (Michelangelo Merisi da Caravaggio, 1571-1610年。近代リアリズムの祖とも呼ばれる)、フランス＝ハルス (Frans Hals, 1581年頃-1666年)、レンブラント (Rembrandt Harmensz. van Rijn, 1606-69年。2人は、リアルな肖像画を描いた)、そして生の風景を対象化したロイスダール (Jacob Izaaksz van Ruisdael, 1628年頃-1682年。) らから、と。しかしバロックの後に新古典主義が起こったためリアリズムはいったん後退する。このためクールベが、さらに「リアリズム宣言」を出さなければならなかったのだった (1855年)。

②文学上の近代リアリズムはもっと遅く、19世紀に入ってからである。すなわち、フローベルやバルザックの自然主義の時期のことである。絵画ではまさに、クールベの時代である。

③われわれの政治学ではどうか。近代的な「政治学上のリアリズム」とされるものは、原理としての性悪論にもとづく政治学の誕生に、すなわちホッブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679年) から始まる。「リアリズム政治学」は、性悪論を採る。人間の欲望が強い以上、もっぱら利益追求や権力拡大に走るため、相互の争いが絶えない。それを抑えるには、暴力的強制力しかない、と考えるからだ。ホッブズは、まさにこの性悪論である。しかもかれはそれに加え、「真理ではなく権威が法律をつくる」(Auctoritas non veritas facit legem) とした点でも、さらには秩序は国家権力によってのみ可能となるとした点でも、政治的リアリズムに関わる。ホッブズでは、ルネサンスがもっていた、美德論とリアルな見方との共存はなくなっており、人間の悪性が極端に前面に出る。それはまさに、バロック的な歪みと、カラヴァッジオのリアリズムとを共有した政治論だ。ホッブズの時代まで来ると、科学は質的に発展する。ホッブズ自身、ガリレオ＝ガリレイ的な、経験的観察によるデータで社会論を構築しようとし、かつデカル

トとも共通する演繹論によって性悪的人間個体から政治学を体系的に構築するに至ったのだ（とはいえホッブズはあまりにも幾何学的記述にこだわっており、かれはまた他方では敬虔なプロテスタントであり、その法学的政治論は、全体がリアリズム政治学だとは言えない）。

他方マキアヴェッリは、性悪論的な言い方をし、人間についての悲観的な記述をしていることはあるものの、ホッブズのような性悪論者でも唯物論者でもない。リアルにものを見る人ではあるが、近代リアリズムの人ではない。かれはむしろ、古代人の軍事・政治行動を模範にすべきだと考える点で、古典主義的で理想主義的でもある。古代人と同じ雑居的思考の人であったがゆえに、二者択一的発想で決めつけをすることはしない。ホッブズ的な一面的・体系的説明の人ではないのだ（もっとも、このように人間のもつ光の面と影の面とを併せ見ることこそ、人間の現実にヨリ近いという点では「リアリズム」と称すべきかもしれない。この点ではホッブズらの一面的な性悪論の方が、観念論である）。

マキアヴェッリの思想をガリレオ的な科学の政治学版だとする人がいるが、両者の間に横たわる100年の隔たりを見ていない。マキアヴェッリが創った市民軍を近代的国民軍と結びつける人がアナクロニズム的であると、同様の関係である。フィレンツェ周辺地域の中世的農民を寄せ集めたマキアヴェッリ的な、臨時の市民軍を、紀律化・技術革新を遂行した、100年後の近世的な（マウリッツ＝ファン＝ナッサウ（Maurits van Nassau, 1567-1625）による軍制革命下の）オランダの常備軍などと較べることは、とうていできない。この点でもかれのモデルは、むしろ古代ローマである（「古代ローマ」の近世・近代性の面をも含めつつ）。

それではマキアヴェッリの思考の多面性は、どこから来たか。一方で、リアルな対象認識（敵・自軍・地理・気象・人間そのものなどに対する客観的な認識）や、道徳に反して行為することの必要を説く議論と、他面での、部下および第三者・敵に対し道徳的に振る舞うことの重視やリーダーの徳性の重視等が出ている議論とは、相互にどう関係しあいつつどこか

ら出て来たか。

それは、軍事や政治にはそうした思考が古今東西を問わず固有であり、古代ギリシャやローマの軍事・政治の歴史書や戦術論の書はそうした思考によって書かれていた、ということに関わる。マキアヴェッリは、そのような古代の文献を深く学び、複合性をもった見方を身につけた、ということだ⁽⁴¹⁾。

ミケランジェロやラファエロの古代彫刻、ダ・ヴィンチの古代人体学に当たるものが、マキアヴェッリにおいては、古代の、軍事・政治中心の歴史学さらには戦術論⁽⁴²⁾だった。ダ・ヴィンチ、ミケランジェロやラファエロ

(41) ニール＝ウッド (Neal Wood, 1922-2003) は政治思想史学者中で、マキアヴェッリと古代軍事論との関係を考え、かれを古代人のエートスに直結する人として理解しようとする、ほとんど唯一の研究者である。かれは、その論文 “Machiavelli’s Concept of Virtù Reconsidered,” (in: *Political Studies*, 15, 1967) の中で、“Machiavelli’s heroes are largely ancients” (p. 161), “Machiavelli’s politico is cast in the mould of the warrior” (p. 171) と、本稿の見方に重なる見方を出している。かれの “Frontinus as a Possible Source for Machiavelli’s Method” (in: *Journal of the History of Ideas*, Vol. 28, No. 2, 1967, pp. 243-248) も、炯眼である。なお拙著『政治の覚醒』(東京大学出版会、2012年) 369頁参照。

(42) ダ・ヴィンチとマキアヴェッリの交わりについて、これまでに確認されていることをまとめておく。

1502年、マキアヴェッリはイモーラ (Imola。ボローニャの南東) 駐留中のチェーザレ＝ボルジアを訪問した (ボルジアは、1499年以来、この町を占領していた)。マキアヴェッリは3ヶ月近くにわたってここの宮廷に滞在し、その間にダ・ヴィンチと親しくなった。ダ・ヴィンチは祖国フィレンツェを離れ、軍事関係の技師としてボルジアに仕えていた。

ダ・ヴィンチは、ピサの力を削ぎフィレンツェを強化するための作戦として、アルノ川の流れを運河建設で転じる策を久しく暖めていた。アルノ川は、フィレンツェを貫いて西に流れ、蛇行をくりかえしつつピサを通して海に注いでいる。ピサはこのアルノ川に貿易港をつくり、地中海貿易で栄えてきた。ダ・ヴィンチの策は、大きな放水路によってアルノ川の流れを、途中からまず北流させ、山間部をトンネルで通過しピサの南方で海に注ぐようにする。こうしてピサの港を機能不全にしてその繁栄の基盤を崩すとともに、フィレンツェまで船が直行できる運河によって、この町を海洋貿易の拠点にしようとするものだった。

ダ・ヴィンチは、これをイモーラでマキアヴェッリに提案し、その支持を得た。

が、そうしたかたちで古代に基礎をおいて古典主義の芸術を展開し、そのことのゆえに近代芸術への道を切り拓いたのと同様、マキアヴェッリもまた、上記古代に基礎を置くことによって、古典主義の政治学を展開した。それが、結果として後の時代の人びとを近代政治学へ導いたのだ。

ヘレニズム期に制作された有名なラオコーン像が、死闘の劇的な苦痛や恐怖を描きつつも、なお端正さ、シンメトリーによる抑制された表情を失わない古典性を有しているように、マキアヴェッリの『君主論』等は、軍事と政治の闘いにおける暴力や策略・マキアヴェッリズムを扱いつつも、なお伝統的徳性や法・自由の尊重を失わない古典主義に立っている。マキアヴェッリ理解には、このラオコーン像や、パルテノン神殿エルギン＝マーブル中の戦闘場面像、たとえば「ケンタウロスと戦うラピス人」像など

計画は、ダ＝ヴィンチが1503年にフィレンツェに帰って来るとすぐに実行に移された。数100人の労働者を動員した工事で、実際に数キロにわたって運河の一部が建設された。だが、現場監督が独断で設計図を変更したので、運河は幅が狭くなりコースも変えられた。このため、1504年の洪水の際にダムやロックが破壊され、計画は中止となってしまった。ちょうど、若きミケランジェロがダヴィデ像を完成し、ラファエロがフィレンツェに住み始め、そしてダ＝ヴィンチが『モナ＝リザ』を描き始めた、まさにその頃のことだった。上記の政治の所作は、今では跡形もなくなっている。しかし、並行して進んでいた芸術活動は、永遠の作品として今も輝いている。

2人は、フィレンツェ共和国防衛のため、他でも一緒に活動した。マキアヴェッリがフィレンツェの軍事担当官であったため、ダ＝ヴィンチはその指導下で軍事施設建築を進めたのだ。1503年、フィレンツェ軍は、ピサ攻略の重要拠点となる、近隣のラ＝ヴェルッカ (La Verucca) の要塞を占領した。マキアヴェッリはダ＝ヴィンチをその補修・改良工事のために送った。1504年にはマキアヴェッリはダ＝ヴィンチを、フィレンツェと同盟関係にある港湾都市ピオンビーノ (Piombino) の城壁の補修・改良工事のために、現地に派遣した。その他にも、ヴェッキオ宮殿の「大評議会の間」の2面の大壁画を画く仕事が、それぞれミケランジェロとダ＝ヴィンチに委嘱された際、これをアレンジしたのもマキアヴェッリだったと言われている。

- (43) ヨハン＝ヨアヒム＝ヴィンケルマンの『ギリシャ芸術模倣論』(1755年) 参照。これを批判したゴットホルト＝エフライム＝レッシング『ラオコオン』(1766年) も、この点は認めている。

の、「なお様式を失わない戦闘者像」のイメージが、もっともヒントとなると言えよう。

マキアヴェッリの世界は、カラヴァッジョの絵の世界のように、人間の暴力性や俗物性、エゴイズム、屍斑や生首を露骨に描いたリアリズムではまだない。人をそこにいるかのように生身の暖かさで描いたフランス＝ハルスや、次第に老いが増す自分を容赦なく描き続けたレンブラントも、まだはるか後の人だ。

マキアヴェッリ論につきまどってきた数多くのアナクロニズムは、正されなければならない。そしてそのための道は、マキアヴェッリの作品のていねいな読解と、それら作品をその基盤である広大な裾野、古代以来の文化史の中で考察することを積み上げていくことのほかにはない。これまでのマキアヴェッリ研究には、この肝腎な手法が欠けていた。その主因の一つは、マキアヴェッリが書いていること、ないし作品の一つひとつを丁寧に読み解き、相互に比較して思考の全体像を考え、かつそれを永い思想史の文脈で考えようとするのではなく、マキアヴェッリを同時代の軍事・政治に直結させつつ概説的に議論したり、かれの個々の言説を全体連関を考えずにいきなり一般命題化したりする傾向と、ルネサンスを近代だとし、かつ（身分制的自由論等の視点が欠けているためもあって）近代をその前史と断絶させる歴史観、さらに中世を古代と切り離す傾向が、古今東西の政治思想史学に、未だに続いている点にある。 完